
死亡フラグぶれいカー

陽当 弾夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死亡フラグぶれいかー

【Nコード】

N9501S

【作者名】

陽当 弾夢

【あらすじ】

ある日ある晩突然現れた未来のオレ。

そのオレは「死亡フラグぶっ壊して長生きしてね」

とか言い放ちやがった。なんでも未来のオレは即死するから

神様が「迷惑だからもう少し生きろ」ってことらしい。

しかしこの死亡フラグとかってやつを壊すために話したこともない
女子

と話したりデ、デートしたり、一緒に……ギャーーーーー！

何でこんなに死亡フラグ壊すの大変なんだあああああ！

#01 長生きしよう(前書き)

今回はファンタジーだけちょっとリアルな
ラブコメを書いてみました！

どうぞよろしくです。

#01 長生きしよう

「よ！こんばんは、オレ。」

目の前の青年に突然呟かれる。正直ここが何処なのかも分からない。周りには高層ビルばかり立ち並んでいるけど、その全てが逆さまだった。とても現実とは思えなくて、夢を見ているようだった。

「ちよつと、お前の夢の中にお邪魔させてもらったぜ。」

いや、夢だった。またしても目の前の青年は呟く。まあ、普通だったらこんなところに

いて、いきなり青年に話しかけられたりしたらそれはそれは元気に「うわあああああああ！――」

なんて叫んでただろうけど、ばつちり『夢の中にお邪魔した』なんて言われたら「ああ、夢か。」

って反応するしかない。というかそれ以外にどうしたらいい？しかしそんな状況でも驚くべき点は残念ながら一つだけあった。この青年、気のせいかなとてつも

なく顔の形が似ているのだ。もう本当に。え？双子？って位に。流石に相手の顔面を直視しすぎたか「ん？オレの顔に何かついてるか？」とベタに問われた。

「あ、いや・・・別に。」

オイオイ、なんで自分の夢の中で緊張しなくちゃなんないんだよ。ねえ、もう起きてもいい？

「そこでさオレ。大つつつ事な話があるんだけどさ、少し聞いてくれよ。」

オレ？聞いてくれよ？コイツなんでオレの事を『オレ』って言うんだ？アレ？間際らしくなってきたぞ。

「イヤ、聞くけどその前になんでアンタはオレの事を『オレ』って呼ぶんだ？オレにはちゃんとした

折さ・・・」オリサキアキヤ「折埼空也って名前があんだろ？」

気持ち悪い。まあ、オレの名前を知ってるってのも十分気持ち悪いけどオレの言葉にワザと続けて言うおうとするあたりが。

「なんでオレの名前知ってんすか？」あーあ、自分の夢の中で敬語使っちゃったよ。

「何で？ってそりゃあ、お前の未来の姿がオレだからな。」

「すみません。お断りします。」

「ええ？断る??」

おいおい、待ってくれよ。夢だからってなんでもありか？というかこんなパツつとしないヤツが未来のオレなんて夢もあつたもんじゃねーよ。

しかしその未来のオレを名乗るオレはこう続けた。

「まあ、聞いてくれ。・・・オレさ、この若さで死んじやつた」

「すみません。お断りします。」

「ええ？いや、ゴメンって、ホントなんだって・・・。」

てか何なんだよマジで。死んじやつたから何？お前あと余命少ししかないんだから童貞早く卒業しろよ
ってこと？ほつとけチクシヨウ！

「オレさ、本当はもつと長生きする予定だったんだって。神様が決めた命の輪廻的に。でもさ、なんつーか不慮の事故？ってやつで死んじゃったわけよ。うん。んで、神様がそれじゃ生命の輪廻に狂いがでるからなんとかして過去の自分から変えて、決められた寿命まで生きてくれっていう神様直々のお願いなわけですね。はい。まあ、そういうわけで過去の童貞野郎のオレには不慮の事故を避けつつ長生きしてもらいます」

「・・・は？え？ゴメン、もう一回。・・・は？いや、言ってることは分かるけどえ？何？神様ってそんな適当なの？何その「あ、牛乳買ってきて」のノリで「あ、長生きしちゃって」って。なんやねん。そんなオレの高スペックな脳をフル回転させている時に未来のオレはさっきの説明にこう付け足した。」

「まあ、なんつーの？不慮の事故が起こる前には『死亡フラグ』が絶対立っらしいんだよね。」

神様によると。だからー、不慮の事故を避けるってことはその死亡フラグをブツ壊さなきゃならないわけ。

んで、神様がその死亡フラグが何時立つのかが分かる目をお前に与える・・・てかもう与えたっばい

から、今から目が覚めたら頑張ってフラグぶっ壊してってちょー！」

と、なんか締めくくりみたいにうまくまとめあげようとしてやがった。そしてあるうことに

この夢の世界が端から消えていく。ちょっと待て！死亡フラグってどういう時に立つの？

それって普通の日常で起こるもんなの？というか何でオレがそんな

ことしなくちゃいけないの？

あ。オレのためか……。じゃなくて、一番聞きたいのは

「どうやってたらそのフラグを壊せるんだ!？」

がむしゃらに叫ぶ。

「えーつとね、何かオレもよく分かんないんだけど、そのフラグが立った時、イベントを失敗させる

ことでフラグが壊れる時もあるし、成功させることで壊れる時もある。的なこと言ってた！

ああ、でもお前の目で見えるのはフラグが立ってるか立ってないかだけで、成功させるか失敗させるか

とかそういう助言的機能は無いみたいだね。」

ええ！ちよ、何イベントって？魔王でも倒すの？オレ？え？ナニイッテンノコノスカポンタン。

それでもほとんど消えかかっている未来のオレは笑顔でこう告げた。

「ああ、失敗と成功の選択ミスってフラグ壊れなくて成立しちゃったら……死ぬから」

[illegible]

・
・
・
・
・
・
・
目覚めの悪い朝でした。

#02 幸せレベル（前書き）

イベントの前シーンと設定です（笑）

#02 幸せレベル

目覚めは曇天。天気は快晴。そんな朝は学校に遅刻しそうになる。いや、嘘ついた。もうそろそろ遅刻。

なんでこんなに学校が始まるのが早いんだ！という決まり文句を中学校で卒業したオレは、

なんで学校などというものが存在するんだ、習った勉強が社会においてどのような場面で

どのように使えるのかご鞭撻いただきたい！という屁理屈へとシフトしていた。

まあ、なぜ朝っぱらからこんなどうでもいいことを考えたりしちゃってるのかというと、それはそれは

狙ったかのようにバスを通過、自転車はパンク、学生は運動も仕事といわんばかりのバッドモーニング

を全力疾走している最中だった。

ちなみに今日見たヘンテコ・・・などと可愛い表現では表せない嫌悪と疑問に満ちた夢について

語らないのは仕様である。

第一アレだろ？『死亡フラグ』なんてものはいわゆる『お約束事』と同じ類で、「オレ、この戦争が

終わったら結婚するんだ」だの「わ、私と付き合ってよ！」みたいな『到底達成できないもの』に対してやってくるものだろ？まあ、つまり

自分にとって喜ばしく、歓喜的なものであるが、それを達成できないように神様が

「今からお前死ぬからその喜びは味わえましえーん」「みたいな感じで奇跡的に死ぬってことだろ？

逆説的にいうと、その歓喜的なものは死を呼び寄せるほどに『幸せ』

なものってことだ。

仮に『幸せレベル』というものがあつたでしょう。普段から幸運があるヤツほど、些細な幸せがあつても『幸せ』と感ずることができない。そういうやつは『歡喜的な幸せ』ってやつが

かなり限定されているから、『告白』程度じゃフラグは立たない。そういうヤツの歡喜的な喜びは

せいぜい『結婚』位じゃなきゃフラグは立たないだろうな。

逆に『幸せレベル』が低いやつほど、どんな些細な幸せも『歡喜的な幸せ』と感ずてしまう。

そういうヤツにかぎって『告白』ってやつだけでコロツつとフラグ立つてコロツと逝っちゃうんだ

と思う。我ながら完璧な理論。

ちなみにオレがどつちなのかというときもまぎれもなく前者だろう。

家はあるし両親もいる。学校にも通わせてもらつてるし、毎日三食食わしていただいている。

ありがたいかぎりだ。だから別に友達とか恋人とか友達とか恋人とか別になくても幸せです。

本当です。強がつたりなんかしてません。涙も出てません。

走り抜けた朝の街並みはとても静かで、とても和やかだった。そよ風がオレの頬を撫でる。

ヤメロその慰めるみたいに風吹くの。別に哀れむべき人じゃないからオレ。いやマジで。

しかし本当は哀れむべき人なのかもしれない。理由の一つは死亡フラグは避けて長生きする

運命に引きずり込まれたこと。もう一つは道の角でそれはそれは可

憐な長髪黒髪美少女と

ぶつかってしまったこと。最後にオレの『幸せレベル』とやらは美少女にぶつかった程度で

フラグが仁王立ちをするほどに低かったこと。

オレの目にはその美少女に死亡フラグが見えた。

#03 ポジティブシンキング（前書き）

今回は少し長いかなーってくらいです。

でも読者様から見たらやっぱり全然短いのかなあ。

#03 ポジティブシンキング

腰まである長い髪。整った顔立ちで白い肌。

どつからどうみてもそこには美少女が倒れていた。そして死亡フラグが立っていた。

なんてベタなんだ！と心の中ではツツコンでみるものの、実は心底本当に死亡フラグなんてものが

見えてしまっている自分に驚いている。そしてたじろいでいる。

その間の時間はぶつかられた相手にとっては怒りを引き起こすには十分な時間で、その少女は
こう言った。

「人にぶつかっておいて謝ることもできないの？信じられないわまつたく！」

敵意と怒りと謝罪を求める眼。しかし悲しいことに罵っているその瞳があまりにも綺麗すぎて

見惚れてしまう自分がいた。まるでビー玉みたいな透き通っていて真っ直ぐな目。

早く謝らなくちゃと思うものの、ここで大事なことを思い出す。

死亡フラグ

その少女の頭の上には棒に三角形の旗。運動会の順位ごとに並ぶ列の先頭にあるフラッグにそれは

酷似していた。しかし実際には小さく、光っていて、ファンタジー臭プンプンの怪しいものが

そこにはあった。そしてゆっくりとこの状況下でなお冷静に働く驚くべきスペックを持つ

オレの脳を最大限に駆動し、昨日の夕飯を思い出すのよりも明らかに難しい『今日の夢を思い出す』

という作業を実行し、オレの脳内CPUを全てそれにつぎ込んだ。

夢の中の残念な・・・イヤ、驚くべき美貌を持った青年はこう言った。

「そのイベントを成功が失敗させればいいんよ。」と。語尾は『いいんよ』だったかどうか定か

ではないが確かにそんなことを言っていた気がする。というかその前にイベントに成功か

失敗意外のエンディングなんてあるのかという常識的疑問がオレの脳内からツートされる。

もしもそれ以外の最後があるのなら是非ご教授願いたい！あと胃が痛い！

そして一万歩と二千歩譲ったとして、そのイベントとやらを成功が失敗かに導くとしても簡単に作業

には取りかかれない精神状態へ持っていく一言をアイツは最後にサラツと言った気がする。

「あ、成功が失敗かの選択ミスって死亡フラグ成立したら死ぬから」と。

つまりどんなにムーンウォークして話を譲っていったとしても、結局最後には何か命をかけた

選択をしなきゃならないってことスか。普通の子高校男子にやらせることじゃないよね。うん。

まあそんな罰ゲームをやるはめになってしまったと。そういう訳ですか。そうですか。・・・・・・・・

責任者呼んで来い。

そして絞り出した一言がこれである。

「あ、すすすすいません！け、怪我とかありませんか？」

我ながらチキンすぎるだろとも思う。でもそれ以上に「怪我とかありませんか？」と

謝罪に心配を混ぜ込むあたり本当に優しい男だなオレは。と思う。

イヤ、正直そうでも思っていないとやっていけない。

そしてこのチキン発言にはもう一つ理由がある。それはイベントに直接関与していない言葉だろう。

という勝手な憶測だ。

本当に個人的考えだが、今起こっているイベントは恐らく『美少女とお近づきになれるかもしれない』

バッテリーシチュエーション』というやつだろう。

パンは銜えてなかったものの、道角でバッテリーぶつかるなんてそうそう無い。

しかも美少女ときたもんだ。十分『イベント』と判断していいだろう。

しかし問題はイベントの『成功』と『失敗』のエンディングである。まあ、『お近づきになれるかもしれない』なんてタイトルに入れてしまった以上文字通り

会話などがテンポよく進み、オレのイケメンさに気づき、あわよくばアドレスを交換！

なんて上手くいく訳ないだろう。バカ野郎。くたばれ童貞。

と、いうのがここでいう『成功』のエンディングだろう。上手いくわけないって思っている

ということは、それほど望ましい最後という訳だからな。十二分にそれはハッピーエンドだ。

んで、実際にこの年頃の男子高校生はマイナス思考の方が得意なわけ。あ、オレは違うからね？

なんでもポジティブに考えるからね？ポジティブすぎて・・・涙出した時もあったから。うん。

まあ、さておき、「アンタキモイ。臭い。ウザイ。存在が許せない。慰謝料請求するからケーサツ

来てくんない？」と、美少女様に罵られ、まあ相手の気分を悪くするとか、まあ良くないベクトルへ

もっていくのがバッドエンド。かなあ……。上手く言葉には表せないケドナ。

まあ、なんとなくで本当に主観的だけど、恐らく『成功』と『失敗』のエンディングを分ける

分岐のカギは『相手の気分』だな。相手がハッピーになればハッピーエンド。

バッドになればバッドエンドになると思われる。

え？何でそんなに断言できるのかって？ははっそれは僕がポジティブ野郎だからさ

そしてオレは深く考えずにあの結末を期待してこう少女に続けた。

「怪我とかあったら全然病院連れて行きますよ？あっ！なんでしたらお詫びにジュースでも！

イヤ、お菓子もつけちゃおうかな！」

そう。相手の気分を良くさせる「THE 媚びへつらい作戦」！！！！

どうだこのイケメンに（自称です）ここまで言われたらさぞ甘えたくもなるものだろう！

恥ずかしがらなくてもいいんだぜ子猫ちゃん。さあ、是非僕の手の上に君の手を！！！！

「あつ、別にいいわ。そういうの。確かにムカついたけどアンタ謝ったし。それじゃ。」

と少女は長く綺麗な黒髪をなびかせて振りかえると、スタスタと歩

いていつてしまった。

・・・・・・・・え？なんでフられた見たいな空気になってんの？え？勘違いしないでよね！ふ、フラグの為にやったんだからね！！

・・・・ん？フラグ？

っあああああああああああああああああああああ（以下声にならない心の叫び）

フラグ！フラグ！！フラグ！！！！

どうなった？どうなった？あのフラグ！そしてマイライフ！！

必死に去っていく少女を見る。確かにまだあのフラグは少女の頭付近にある。

しかしそのフラグは静かにシャン・・・と消えていくのが見えた・・・・・・はずだ！

どうやら今回は無事にフラグを折れたらしい。っていうか命がけの選択を何「これがTHE 媚びへつらい作戦」だ！とかほざいて悠長にブチかましちやってるの？バカなの？死ぬの？マジで死ぬの？マジで死ぬよ？これ神様のお墨付きだから！

そうして本日二回目のエンドルフィン大放出版は幕を閉じたのだった。

そしてやっぱりここはお約束というべきか。遅刻フラグの野郎は直立不動でオレの目の前に

立ちふさがっていたのだった。

・・・・イヤ、よく見たら体育の先生だった。

#04 偶然か奇跡か（前書き）

ちよつと繋ぎのために今回は女の子成分が足りません・・・。

#04 偶然か奇跡か

新学年。

新たな学年になるこのめでたい日に遅刻をブチかましてしまった才
レは、

こっぴどく叱られてきた。なんてベタなことは言わない。

朝とても素晴らしいベントに出会ったが、その代償に少しだけ。ほ
んの少ーーしだけ
イヤな目にあっただけだ。

今日から高校二年生なわけで、そろそろ彼女の一人でもほしいな
ー
とは思うものの、
いかんせんオレにはそんなキャツキャウフフなんてしてる時間がな
いのだ。

イヤホントだよ？別にいいわけとかじゃないから。証拠に部活に入
ってないし！ほら忙しい！
ほーら忙しい！！

まあそんなこんなで只今教室。
クラス替えの後のクラスというのは知らない友達ばかりだから、
いつもよりも話声が少ない。
まあ開き直るけどクラス替えなんてしてもしなくても話せるような
ヤツは一人もいないがな。

まあオレマイペースが信条だし？オレなりに頑張ってるし？
と強がる二年目の春。流石にどんなマイペース野郎でも一年あれば
友達の一人でもできるだろ

なんて言ってくる友達さえまだできないんだから驚きだ。イヤ本当に。

しかしそんなことはどうでも良かった。最後列窓際という最高の席になりテンションが上がる

はずなのにオレのテンションは超低空飛行をブチかましていた。

最後列窓際ということは後ろにも左にも席はない。あるのは前と右だけ。

前の席は振りむきさえしないだろうから良いが、………ちょっと、憐みの視線禁止。

問題は右の席のヤツ。九割の一般生徒なら、「そこには誰もいない！」となんと残念な

思いこみにより、気にせずに過ごせるのだが、いかんせん残り一割が問題だ。

その残り一割に分類される生徒の種類。それは『美少女』だ。

美少女はマズイ。何がまずいかって『美』とついてるくらいだから完璧に目立つ。

すると気づかれないようにひっそりと過ごしていたオレの存在がバレル上に比較対象として

さらにオレのイメージが落ちる。ふざけんなよこのイケメンの魅力が分かんねえのか！

と叫びたいがやめておこう。何故かって？時代がオレに追いついてないからさ。

そして一番厄介であろう問題がある。それはサッカー部とかバスケットボール部とかの

イケメン野郎どもが湧くことだ。アイツらはリア充とかいう人種に分類されていて

何故か美少女を狙うという習性を持つ。ソイツらの「あっ、オレの子と話しがしたいから席あけて

くれない？」みたいな感じでからまれるのがたまらなく気に入らない。

何でそんなこと知ってるのかなんて野暮な質問はNGだぜ？無論体験済みだからだ。

『体験済み』という響きにはなんか勝ち組のオーラが漂っているけどオレからもそのオーラ出てる？

まあ早い話こうだ。

オリサキアキヤ

私こと折崎空也のとなりはビックリする位の美少女でした。

ついでにいうなら今朝ぶつかった黒髪美人でした。

はい質問。これからどうするよ。

イヤマジで！何この奇跡の確率！悪いが同じ学校だとも分からなかったほど面識ないのに

偶然今朝ぶつかった美少女がオレの隣？何してんの神様。今凄く鮮明にアナタのドヤ顔が

浮かんだんですが。

気まずっ！どうするよコレ。流石にフラグは立ってないけども。イヤイヤ、オレの幸せレベルが

美少女と隣になった位で立つ思ふなよ？なめんなよ？と朝美少女にぶつかった位でフラグが立った少年

が叫んでみるがどうだろう。説得力はあったかな？

とにかくこの気まずい空気がこれから毎日続くと思うと吐き気……はしない。

しかしどうしよう。頑張って普通の女の子と思ひこむか。そうだな。

オレは美少女だと思っても他の人は「別に可愛くなくね？」とか

つてなっているかもしれない。
きつとそうだ！と思うオレの近くに野生のサッカー部男子が三匹現れた。

チクショウ。そうしてオレはトイレへと走った。その姿は青春を追いかけて夕日に向かって走る少年に似ていたという。

そして放課後。結局アチラからの接触は無かった。まあそれは恐らくオレが「あの子は虫だ！あの子は

虫だ！だからオレは無視する！……中々面白いなコレ。今度使うべきタイミングで使おう。」

と思いこむ『あの子は所詮ただの虫ケラ』大作戦の効果だと思う。

ま、あの子もオレのことをそう思っていただろうな。イヤ、さしずめそこらへんにある埃。と言ったところか。

流石にされは酷いんじゃない？と声をかけそうになったがやめておいた。

コイツ居たんだ……。なんて冷たい目をされるに決まってるからな。

そして身支度を整えサッサと下校しようかと思うと担任に呼び止められ、何やら怪しい教室に

連れられて行く……。え？何？誘拐？イヤだそんなの！僕はまだ死にたくない！

生き延びて見せる！「つつ、話して下さい！僕は誘拐なんてされたくない！おウチに帰るんだ！」と叫び、廊下を全力で走る。

予定だったが美しき筋肉美を持つ体育の教員はオレの全速力を止め、無言でアーチを描くように一本背負いをキめた。

「お前はこの前の小テストと今日の遅刻について反省文を書け！五枚書くまで教室から出てくんな！」

「そ、そんな五枚？無茶言つなよゴリマッチョ！オレにはオレの帰りを待つ妻と子どもが・・・」

「書き終わらなかつたらお前の妻と子どもを殺す。」

「そんな殺生な・・・」

そうして教室、イヤ監禁部屋とでもいうべきか。に投獄されたオレは席につい、ふと気づく。

教室の前の方に誰かが座っているのが確かに見えた。

後ろ姿は長い黒髪でどこからどう見ても女の子だった。まさかオレと同じように残されているとは

可哀そうに。と、何故か上から目線にその少女を見ていると

オレが発した物音に気付き、その少女は後ろをその長い黒髪をなびかせて振りかえる。

そこには今朝ぶつかった少女であり、オレの右隣の席の女の子の可愛い顔があつた。

・・・またお前か。

#05 私たちのサークルに入らないかしら（前書き）

一日一件でもアクセスがあると

嬉しくてテンションがあがる今日この頃です

#05 私たちのサークルに入らないかしら

ここまで偶然が重なると、もはや運命すら感じてしまうこの少女。しかしそんなもの感じたところで隣の席なのに一言も話しかけてこなかった位だから

本当におれなんてあの子にしてみたら虫ケラ位なんだろうなと反省文に費やす脳内思考を女の子を想うことに指向させているとふと気付いたことがあった。

確かにコイツは男子にモテるんだろう。だってさっきサッカー部のヤツら来てたし？

オレだってか、可愛いと思っちゃったし？そりゃあ思春期の男の子だもん。それくらい考えるもん。

とまあ気になったのはこの次。男それは男子は寄ってくるけど女子があまり寄ってこなかったということ。

何でそんなこと知ってるのかって？そりゃあホラ、隣の子がどういう子なのか知っておきたかったから観察してたんだよ。うん。今後の為に。イヤ、決して見惚れてたとかチラチラみてたとかそんな低レベル

なことしてないよ？あくまで純粹に好奇心の塊で観察した結果だからね？

もう厳密すぎて観測って言い間違えてもいいくらい。

しかし別段女子からあの子が嫌われてるわけではないと思う。話したこともない童貞野郎に何が分かるんだと言われたら返す言葉もなくてそこらへんのメダカと一緒に遊び出すけれど、これは間違いではない気がする。

しかし『近づきたい』というのはあるかもしれない。そこらへんのイケメン（笑）

はウジャウジャ自分を売りにやってくるが、そこに女子も湧いては、『男子目当てに近づいてくる女』

なんて思われてもしようがないわけで、その点『近づきたくない』じゃなくて『近づきたい』

だと思っ。

何でこんな分析をしているかという反省文のやる気が核爆発起きても出そうにないので

ボーっと前の方の席の少女について思案しているのである。

アレ？オレ・・・もしかして恋してる？

何て思う訳もないがもし思っちゃってもそれはそれでオレのことを愛している死亡フラグちゃんが

「私の男ー！！！」と元気よく飛びついてきそうでシャレにならん。

時間にして約二十分。少女は静かに立ち上がった。

どうやらもう終わったらしい。なんだよオレ一人かよ。でもお前はオレの隣の席だからな。

これから毎日ジロジロみてや・・・観察してやるぜ。

と変態的思考に指向している少年の反省文はまっサラなわけで、少女と違い、当分帰れそうもない。

少女が身支度を整え、オレにあいさつの一つもなく少女が教室から立ち去ろうとすると、

ちょうどその少女が出て行こうとした扉から教室に入ってこようとした少女とクラッシュ！

あっちゃーとオレは一瞬下をつむつたが、恐る恐る目を開く。

そこには仲良く倒れてる少女が二人いた。一人はオレの隣の席の女の子。

もう一人はこれまた肩までかかるくらいの髪でそれはそれは綺麗な女の子が倒れていた。

なるほど『類は友を呼ぶ』とやらか。ありがとう隣の少女！

今日一日で二人も美少女をお目にかかれるなんて！

とかって残念思考に入っていることに気づき、一人で悶悶。

悶悶とモミモミって響き似ててエロくない？なんてことを思った瞬間そんな考えを地平線

の彼方へぶっ飛ばし、しょうがないから手かしてやるかと思ひ席を立とうとした。

・・・のだが、オレの隣の女の子にぶつかった女の子が勢いよく飛びあがり

こう叫ぶ「だ、大丈夫？時雨ちゃん！今何かにぶつかったんだけども

時雨ちゃんは何とも無かった？むむむ何奴だ！時雨ちゃんにぶつかったバカ者は！！」

「お前だバカあー！！」と半泣きでオレの隣の席である時雨ちゃんとやらが叫び返す。

するとぶつかった少女はハツとしたように謝りもせずこう続けた

「そ、そうだ！時雨ちゃん！私大事な話があつて来た・・・ん・・・

だけ・・・ど。・・・怒ってる？」

「怒ってない！！！」と明らかに顔に出てるくせに何故か真反対のことを言う時雨ちゃんとやら。

どうやら痛みを堪えるのに必死なようでぶつけたであろう額をさすっている。

反対に「無傷？」って思うくらいピンピンしたぶつかった美少女ちゃん

「えつとね、えつとね！何かさつき先生から聞いたんだけど、私たちのサークル

今年新入部員が二人は入ってこないと廃止になっちゃうんだって！

どうしよう時雨ちゃん！

どうしよう！！」と本気の焦った声で訴える。

ウチの学校には『部活動』と『サークル』があり、部活動の方は専門の顧問がついた

スポーツ中心の正式団体。そしてサークルというのは担当の先生はいるものの、

形ばかりであまり干渉せず、基本サークルメンバーだけで活動するいわば『同好会』のような

もの。サークルは部活動に比べ、自由に作ったりできるので顧問の先生争いが年中続いている。

らしい。まっオレはどっちも入ってないケドナ。忙しいカラナ。ウン。ホントホント。

アキヤ ウソ キライ。

なのでこの少女達の所属するサークルも部員が少ないとかで他の部員が多いサークル、

もしくはこの新学期新しく作ろうとしているサークルに担当の先生をとられちゃうとかで

『最低新入部員二人』というのはサークル存続の最低条件なのだろう。

その話を聞いた時雨ちゃんは静かに立ち上がり

「それなら頑張りましたよ！私たちの活動は一年程度で終わるようなものじゃないわ！」

と何とも可愛い笑顔で少女に告げる。

自然その少女の顔は笑顔になっていき、「時雨ちゃんならそう言うてくれると思った！！」

うん！ガンバろ！！時雨ちゃん大好き！！」

と女子校でしか見られないと思っていたお宝画像。『美少女に抱きつく美少女』がオレの

目の前にアップロードされた。

「ちよっヤメテってば！早く部員探すんでしょ！」とひっぺがそうともがく時雨ちゃん。

「うん！では行ってまいる！しゅたああー」

と少女は元気よく走り去っていく。

そしてその時雨ちゃんは一息つくとは何故かコチラを見る。

え？何？まさか・・・告白？

え？どうしょ！見かけによらず大胆だなこの子は、しょうがねえな。オレがいねえと何もできねえんだから！

と悲しくなってくる位のポジティブシンキングをしている間に少女がオレを見ている理由が

判明する。実に簡単。倒れた二人の美少女を助けてあげようとした心優しき少年が

突っ立ったまま、その少女のいるドアの方を向いているからだ。

少女達のヤリトリを見ていたら座るのを忘れたという何ともどうしようもない状況。

ここから『座る』という動詞を発動させるのは難しいと思われ・・・イヤ普通に難しい！！

見つめあうこと5秒弱。少女の口が開いた。

「アンタ・・・教室で私の席の隣の野郎？」

「え・・・あ・・・はい・・・そ・・・です、けど・・・」

野郎？何を言っちゃってるんだこの子は！アレかな？あの子も緊張して言葉遣いがおかしくなったのかな？

なんだよ可愛いとこあんじゃねえかよー。

と一応優しい視線は送ってみるも少女の鋭い眼光は変わらない。

「アンタ・・・部活やサークルは入ってるの？」

「ひゃえ！いいいいいいイヤ、入っていません！」

ビックリしたー。『ひゃえ』だってよ。しかも敬語使っちゃったっていうね。

そんなに何でも切れそうな鋭いめで見つめながら言っくんじゃねえ！普通にビビるわ！

というか敬語とかに慣れちゃって上下関係みたいのが成り立つちゃったら明日から教室でどうすんだし！

何？女の子とかからパシられんの？喋ったことも無いに等しいのに？しかし今女の子と、しかも美少女と話しているということに気づき、少し喜んでいる

オレがいるという悲しい現実に気づき、オレの幸せレベルが低すぎることに目から汁がでそうになる。

そんなことを思っていると少女は一息おき、こつ静かに告げた。

「私たち『ミステリーサークル』に入ってくれないかしら。」

その少女の笑顔の一言はとても眩しくて、輝いているように見えた。イヤ例えとかじゃなくてマジで。だって死亡フラグ出現の輝きだもん。

できれば隣に死亡フラグが無い状態での少女の笑顔を脳内メモリーに名前を付けて保存したいと強く思ったある日の放課後。

#06 脅迫に近い勧誘（前書き）

感想や指摘点などがありましたら気軽に書き込んで下さい！

#06 脅迫に近い勧誘

死亡フラグ

オレの目の前には本日二回目の死亡フラグが立っていた。

つつてもこの死亡フラグは例えとかじゃなくてマジで死ぬからシャレになってない。

しかしこの少女は今何て言った？『私たちのサークルにはいらなにかしら』とか言ったか？

まあ確かにこのイケメンを自分のサークルに入りたいというのはよく分かる。ええ分かりますとも！

と現実的でない解釈を無視したとして何でこんな初めて会った男子をサークル勧誘なんて

するんだ？今年入ってきた新入生でも歓迎していればいいものを。何でオレ？何この子、オレのこと好きなの？それとも罠なの？

あー、考えたくないけど後者だ。だって死亡フラグ立ってるもん。ギリッギリしてるもん。

しかしまあ理由も聞かず断るのもアレだから少しのってやるか。

「その『ミステリーサークル』ってのは何なんだ？」

すると少女は何故か偉そうに胸を張り・・・まあ張るほどの胸はないが顔が可愛いからよしとしよう。

逆にオレに聞き返した。

「まずアンタ、ミステリーサークルって知ってる？」

「あ、ああ。外国の広大な畑とかに一夜でできる奇怪な陣のことだろう？」

「そうよ。その『ミステリーサークル』と、『部活』や『サークル』

とかの『サークル』

をかけた素晴らしきサークルなのよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

呆れた。・・・というのは少し違うか。うん。驚いた。

イヤ、そのネタがつまらないことにも驚いた。いやーこんな子でもギヤグっていうんだなー

へーなるほどなるほどと最近の女子高生事情にメモをしつつどうやってこの不思議美少女から

逃げて帰るかという思考が加速に加速を重ねていた。

しかし『ミステリー』って付くぐらいだから

「オカルト研究会かなんかか？」

と疑問を重ねてみる。

「そんなチンケなサークルじゃないわよ！」

と怒り気味で言い返す。

そんなこと言われたって・・・と、どうしようもないのでオレの前向きすぎる脳をフル駆動してみた。

あの女の子は自分のサークルに入ってもらいたいと思っている。

さらに死亡フラグが立っている。しかし個人的にはそんな初対面に会ったばかりの男子を

勧誘するような何をするか分からない怪しいサークルに入りたくない。

そして相手は何故か怒り気味でいらつしやると・・・。

なるほどなるほど。・・・・・・・・・・よし、反省文を書こう。

そうしてシャーペンをノックし、用紙に文字を並べ始める。

・・・・・・・・よし、この調子ならもう少しで1枚終わりそ・・・
ヒュッ

何か白い弾丸のようなものがオレの頬をかすめた。そして冷や汗が伝う。

「お、おお前！チョークを音速レベルで投げるんじゃないやねえ！当たったらどうすんだ！」

「あれ？当てるつもりだったんだけど。まあもう一発撃てばいいか」
「待て待て待て待て！何でそんなことすんだよ！」

「だってアンタが私の話を無視するからじゃない！」

「なっ！だってそんな真面目な顔でクソつまらんネタ言ってくる女子とまともに会話する

話術をオレは持ってないんだよ！」

すると少女はワナワナと震え、握り拳を作って

「っ、つまらんネタ？？こっ、この神秘的で素晴らしいネーミングセンスが分かんないのアンタ！
信じられない！」

「こっちの方が信じらんねーよ！なんでわざわざサークル名にネタはさむんだよ！」

「だってだって普通の『オカルトサークル』なんてイヤじゃない！」
「そんな寒いネタの方がイヤだわ！！！」

といつの間にか怒鳴り合いになっていた。何だこの女子は！もっと普通のおしとやかな

美少女だと思っていたのにメチャクチャ怖えよ！なんだしマジで！アレか？そんなに外見が良いヤツは外見があまりよろしくないヤツを苛めたいのか？

チクショウ！ならばここで負ける訳にはいかねえ！全国の外見があまりよろしくない方のために！

よーしどつからでもかかってこ……し、しまったあああああ
あああああああああ！

そうだ！この少女の言動から死亡フラグが立つたんだ！つまりオレ
の一挙一動はオレの

命に関わるということ！しかも何かそのフラグを壊すのは今朝『相
手の気分を良くすること』

なんて勝手に定義してたけど、もうあの子の怒りようからしてここ
から『気分を良くする』なんて

至難の技すぎる！とゆーかよく成立しなかったな死亡フラグ。

しかし相手の気分などが死亡フラグに関わらないとしてもこれ以上
相手を怒らせるのは

色々とマズイ気がする。よし、ここは一つ、さも『ミステリーサー
クル』に興味を

持つてる風に聞いてみよう。

「あのさ……その……何でオレなんだ？別に今年入った新入部
員でもお前と中の良い男子でも

女子でもいいだろ？よりによって何でオレなんだ？」

ええい！もう相手の機嫌とるのはやめた！とりあえず言いたいこと
は言おう。

と思って思いきって言ってやった。おし！コレでもう悔いは無いぞ
！例え死亡フラグが成立

しようとも悔いは無いからいつでも死ぬ覚悟はできている！

……ゴメン嘘ついた。正直無理、死ぬのイヤ。

そうしてオレがあーだこーだ悶絶していると少女は考えがまとまっ
たかの様に口を開いた。

「はあ、そうね。何も分からないわよね。じゃあ説明するわ。『男
子部員を最低でも一人以上入れる』というのが

今年の私たちのサークルの存続条件なの。今女子部員しかいないからただの『お遊びサークル』

なんじゃないかって声が上がってるところなのよ。私達的には真面目に取り組んでいるのだけれど

やっぱり新しいサークルを作りたい人が多いから顧問の先生の取り合いになっていてね。だから男子部員

が入れば女子だけの仲良しこよしのお遊びサークルじゃなくて『男子からも入部希望者が出る

ほどのサークル』ってことで周りを黙らせることができるの。確かに新入生の男子を誘うというのも

いいけれど新入生は高校に『サッカー部のキャプテンになりたい』だとか『バスケの大会に優勝したい』

だとか少なからず憧れをもっているものなのよ。だから新入生は難しいと思うの。

それで二年生にもなって何も所属していなく、性別が男の人材を見つけたから懇願しているまでよ。」

と、リアルなことを言ってきた。というかその話し方から言って『懇願』じゃねえよ。

ほとんど命令に近いよ！しかし残念なことにそんな話されたところでオレの気持ちは微塵も変わらず、

こう答えを出していた。

「それでもオレはオカルトが嫌いってわけじゃないけどそういうサークルには入りたくねえな。

多分他のサークルとかに入っていない男子なんていくらでもいるから頑張っただ探してくれ。」

そう言い放ってオレは再び原稿用紙と向かい合った。正直死亡フラグは立ったままだが、

今回は壊れる気配がないのもう放置とかでもなんとかなるんじゃないか？なんて甘い考えがあった。
でもまだ壊れていないってことは『成功の選択』も『失敗の選択』もしてないってことなんだろう。

少女はとても悲しそうな顔をして鞆を持ち、シヨンボリと重い足取りでドアの方に向って行った。

マズイ。死亡フラグを立てたまま帰られては困る！それってオレの心臓を家にテイクアウトする

ようなもんだぞ！そんなホラーなことチキンなオレが見逃す訳がないだろう！

そう思っただけを立ち、その少女を呼びとめようとしたら少女は振り向かずにこんな呪文を唱え出した。

「そうそう。別れ際に教えておくわ。今日休み時間にサッカー部の男子に言われたんだけど

今朝の衝突事故。あの場面男子達に見られてたらしくて、アレ、アントアが私のこと押し倒したってことになってるみたい。

もしかしたらアントアの呼び名が明日から『非行童貞野郎』になっても仕方ないわよね。

誤解を解けるのは被害者である私しかいないけれど仕方無いわよね。だってその被害者が誤解を解こうとしないのだから仕方がないわよね。」

「！！！！！！！！！！」

な・・・なんてこった・・・。確かに今まで友達すらもなく、黙々と一人でいたが

それは逆にオレからは何もしいからアッチから責められるようなことは無かった。

その均衡がなんだ？今朝のあの事故で全てブレイクされるというのか！そんなバカな！

童貞と言われても言い返せはしないけれど非行なんて付けられたらそりゃもう……

ああチクシヨウ！そういうことが死亡フラグ！！朝の大惨事が他のヤツに見られてたつてことで
ある程度この死亡フラグに繋がるルートができてたつてわけかチクシヨウ！

というかなあ！今朝のたつて他人からして見ればそんな風に見えてたとしてもコツチは死亡フラグ

立ってたんだからな？命かけてたんだからな？それをそんなオレが悪いみたいになっちゃってまあ

母さんは世間をこんな不平等に育てた覚えは無いわよ！

くうう、どうする。あの意味の分かんない変なサークルに入るか明日から悲劇的な名前付けられて

呼ばれるか。そして死亡フラグ……。

オイオイマジで神様何やってんの？何で一日に二回も死の崖っぷちに立たされなきゃいけないの？

こんなハイペースでフラグポンポン建設されちゃ絶対三日位で選択間違えてお陀仏だよ？

うーん……しかしこのペースでいくとやはり死亡フラグを優先するべきか。

そうすると今朝得た情報からして相手の機嫌を良くした方が良く
となるとやはり

サークルに入るしか手段は無いか……。でもその苦を超えればオレのヒッドイ呼び名が

未然に防げるかもしれない。

・・・なるほどな。全てはこの女の思い通りになれば事は上手く運ぶってわけか。

まるでオレの運命がこの少女に委ねられてるみたいだな。

ああもうしょうがねえ。死ぬのはイヤだ。と、そんな名前で呼ばれたくない。で2。
怪しいサークルに入りたくない。で1。2対1で出たオレの結論は彼女にこう告げた。

「はあ……。分かったよ。二年D組8番折崎空也。^{オリサキアキヤ} ミステリーサークル
に入部したいんだが部長は誰だ？」

すると少女は振りかえり、見惚れる位の笑みで優しく、そして活気ある声でこう言った。

「私が『ミステリーサークル』の部長、二年D組15番智風時雨よ。^{チカゼシグレ}
是非アナタを我がサークルに招待するわ。」

その少女が再びドアの方を向くころには死亡フラグはキレイサッパリ消えていた。^{シボウフラグ}
まったく、お前はあの女の道具かつつの。

#07 曇天から曇天へ（前書き）

お気づきの方はいるかもしれませんが一応一週間に一つのペースで今まで上げていたのですが、今週は用事により

こんなに遅れてしまいました。これからもこのようなのは極力避けたい

とは思いますが、もしまた投稿が遅れてしまった時は暖かい目でお待ちください。

本当にすいません。

では、どうぞ興味のある方は『曇天から曇天へ』お楽しみください
！

#07 曇天から曇天へ

翌日。天気はオレの心を表したように曇天。

なんでオレの心が曇天レベルかっていうともうそんなの分かり切ってることじゃないですか。

そうですよ。アレですよ。古典のテストが赤点だったんですよ違いますよ。

ミステリーサークルつつう変な部活の活動日なんだよなあ。

今現在六時限眼だからこんなことを思っているのだが、オレの隣の
チカセシグレ
智風時雨

はどうやら一分ずつ授業終了の時間が近づくごとにテンションが上がっていつてるらしい。

この反比例の空気からどうやって抜けだそうかと5秒考えた結果寝ることにした。

だって何するのミステリーサークルってサークルは。毎回毎回変な儀式をしているイメージしかない

のですが。そして怪しい呪文唱えたり、自分の血をナイフにつけたり。

考えただけでも気持ち悪い。ああダメだ、今日は帰らなきゃ。

「なあ智風、今日は気分が悪いから帰

瞬間オレの言葉は途切れ、代わりに何か白いもの、残骸を見る限り消しゴムと思われる物体が音速で飛んできた。

つと悠長に構えてはみたものの内心かなり驚いてるぞオイ！

何でこの子は毎回何か物を音速でしかも人に向かって投げたがるんだ！

当たったらどうすんだ！・・・イヤ、当たってたら痛いどころじゃ

ねえな。それこそ死亡フラグ
立つ前に即死レヴェル。イヤだこの子怖い本当に帰りたい助けてマ
マ。

しかも驚くべきことにオレが勇氣を持つて智風の方を向いてみると
それはそれは悔しいが
見惚れてしまう位に可愛い笑顔でオレの方を向いて

「あら折崎君。顔色が悪いわね。ところで何か言った？」

と言いやが・・・おつしやられた。まあどつか心の奥底では悲しい
事にオレのチキンハートが

『この子には敵わない』という結果をだしていたので、どうせ今日
は部室行かなきゃいけないんだろうな

と思いつつも、それでも挑んでいったオレのチキンハー・・・
イヤ、ライオンハートに称賛を送って睡魔に全てを委ねるとしよう。

・・・・・・起きたら夢でしたなんてオチにならねえかなあ。
そう思った少年に暖かい日差しが当たる。待つてくれ天気よ。オレ
の心はまだ曇天なんだ。
おいてかないでくれよ。

女の子と手をつなぐ。あ、間違えた。コレ『手首をつかむ』だね。
そんな夢も希望もない体制で部室へとオレと智風は向かっていた。
普通に女の子と、ましてや智風みたいな外見だけは美少女と手をつ
なぐなんてシチュエーション

があつたらオレのテンションも上がるものを、『逃げないように。』
という、まあなんとも単純明快、至極簡単な理由で絶賛手首をつか
まれえて引つ張られています。

こうでもしなければすぐに逃げ出す。という思考にたどり着いたの
がもう凄い。大正解。

そうして連れてこられた部室。部屋の扉の前まで行くと、智風は
「今日使う資料持ってくるから先に入つてて。」と、職員室の方へ
向つていつてしまった。

え？何？見ず知らずの他人が勝手に部員名乗つてここに入つてくの？
きまずっっ！！なんだこの羞恥プレイ！無理無理こんなチキンには
ハードル高すぎ。

さて智風もいなくなつたことだし丁度いいから帰ろう。そう思つて
振りかえると目の前に顔！！

「げっ！ち、智風！！」

「あれ？どうしてこっちを向くの？扉はアンタの背中側なのに。」

笑顔で言つてくるところが何とも怖い。何だよお前……。資料ど
うした。

すると智風はそれだけを言つてスタスタと廊下を歩いていつてしま
つた。

なるほどね。これくらいの恐怖を与えておけばこのチキンは部室に
入らざるを得なくなると

踏んだんだろう。大正解。もうさっさと部活終わらせて家に帰ると
いうなんとも健康思考に

オレの思考はシフトしていた。

振りかえり、ゆっくりと扉を開ける。

「し、失礼しまー……。す」

中は真つ暗だった。何だ部活やってないんじゃないかねえかよ。と思って、帰ろ。と振りかえろうと

したが、またあの可愛いらしい恐怖の顔面があつたらイヤなのでとりあえず

人がいなかった。ということと言い訳にするために電気をつけて確認しようというなんとも

丁寧な作業に移ろうと壁を伝って、真つ暗な闇の中の一つのスイッチを探す。

ちくしょうどこにあんだよ・・・と、何とも不親切な設計にイラ立ちつつ、やつのことで

何かに触れる。

あーあつたあつた。ったく、電気位つけとけっつーの。と、むにゅつと電気をつける。さて、誰がいるかなーつと。

アレ？おかしいな、電気がつかない。もう一度むにゅむにゅつと電気をつけようと試みる。

しかし何度やっても電気はオレのことを無視する。

クソっ、オレ電気にまで嫌われるようになったか？と、何度も何度も試してみるがやはりつかない。

すると突然電気がついた。んだよ接触悪いのか？ちゃんと整備しとけて、まったく。

しかしそこで見たものはそれはそれは異様な光景だった。

まあ、何度もオブライトとビブライトに包んで説明したいところだが、あいにくそんな悠長な

ことしてる暇などない状況が目の前には降臨していた。

もうぶっちゃけて一言で言うと、少年が少女の胸を鷲掴みにしていたのだ。

『鷲掴み』ということは鷲のように凄まじい握力で掴んでいることが意味としては正しいのだけど、

少年の手は気持ちよさそうにソフトに優しく掴んでいた。

そんなことよりもまず先に、というか一番驚いたのはその少年の手が何とだれも予想していなかったであろうオレの手だったってこと。はいココ大事だよー。テスト出るからねー。人生の失敗点についてのテストに。

接触が悪いのはオレの方だった

#08 照れ隠し（前書き）

すいません！

個人的に納得がいかなかったので書き直しました！

そして投稿にかなりの間が空いてしまい、本当にすいませんでした。

もうこれからは当分原稿を書く時間ができたので、頻繁に登校していききたいと思います。。。良い話が思い浮かべば。

これからどうぞよろしくお願いします。

そして感想や意見がありましたら気軽にどうぞです。

#08 照れ隠し

モミモミ。

こんな感触がするスイッチは初めてなわけで、正直疑問と好奇心が沸いていた。

大きくもなく、小さくもない完全に手のひらに収まるようにして存在するソレは

オレをなんだか不思議な気持ちにさせていた。

しかしこれはいったい何の素材でできているんだろう。今までにな
い感触。

否、オレこの感触を遠い昔に味わったことがある。

遠い昔。そうまるで生まれたての赤ちゃんがその無垢な手で触れる
ものと酷似している。

たしかそう、名をおっぱ……

っバチン!!!

見ると目の前の少女が俺の頬を思いつきりひっぱっていた。

プルプルとその可愛らしい体を震わせていた。

髪は長く、ストレート。整った顔立ちで十分美少女と呼んでもいい
子だった。

すると隣で何か物を盛大に落とす音が聞こえた。

振り返ると少女が手に持っていたであろう書類をバラバラと落と
していたのだ。

「……アンタ何やってんの？」

「いいいいいいや、これはだな、ふ、不慮の事故ってやつで、ちょ
っと待てまず落ち着こう。」

そしてその構えている握りこぶしを解くんだ！待てってホントに！」

「・・・・・・・・」

「いやいやオレただ電気を付けようとスイッチを探してただけで、気がついたらこうなって

たんだって！」

「・・・・・・・・」

「いやホントに！これは違うんだ話をすれば分かる！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

何てこった。何でこんなことになったんだ？普通に考えてヤバイだろ！

女子と手をつなぐ・・・イヤ話すらろくにできてないオレがラッキースケベだとかなんだとか

でこんなところをあんな奴に見られるとは！

しかもこの部活に入部する条件として『非行童貞』という異名を消し去るってことも入ってたのに

バツチリ言葉の裏づけとってんじゃん！バツチリ童貞じゃん！

まったくこんなだから未来のオレもすぐに死ぬんだよ。死亡フラグ？ざけんなよ事はもう起こってるんだよおお！

と声にならない声で叫んでみるが所詮声にならない声なのでオレの気持ち虚しくやはり

オレの事を酷く蔑んだ目でこちらを見る。

「怒った姿も可愛い」と言おうとしたが死期が全速力で迫ってくるだけなので止めた。

部室の中は綺麗に整っていて、真ん中に机が6つ、周りに本棚などと、そこそこ広い空間だった。でも空気はそこそこ悪く、いやそこそこじゃねえな、もうホントにドロドロレベル。

とかってその空気の製作者本人が一番嫌がっているんですけどいったい今から何が始まるんですかと、問いかけたいくらいな空間がそこにはあった。嘘ですすいません僕が作りました。

6個ある席のうち一番窓側がオレ、正面に黒髪ストレートな悔しいことに美少女

智風時雨（チカゼシグレ）。そいつの隣になんとも不機嫌そうに本を読んでる謎の短髪

被害者美少女、そしてオレの隣にはニコニコしながらこちらを見つこれまた美少女がいた。

「じゃあ新入部員もいることだし、また簡単に活動内容を説明するわね。」

と智風はさつき落としてしまった資料を見ながら説明に移る。

まあ確かに『ミステリーサークル』なんて聞いたこともないし、正直まさか自分が入部することに

なるなんて思ってもみなかったから説明は詳しく欲しいところだ。

うん。そうだな、具体的にはここは一体何をするとこらな……

・

アレ？何か忘れてない？なんかとっても大事なこと。今回不思議なことに死亡フラグ立って

ないからスルーしちゃったけどオレ確か

「あの……さ、さつきのことは……」

と残念なくらいキョドリながら聞くと智風がこちらを睨みつける。

「さっきのこと？ああ、古式の事ね。気にするな、とは言わないけど思いつめなくて良いわ。」

本人がそう言ってるんだし。」

「え！あつホントか？そっか、良かったー許してくれたんだな。」
「違うわよ」

と彼女は否定をする。

え？気にしなくて良いってことは許してくれたってことじゃないの？え？この子言ってることが
かみ合わないんだけどちょっとお兄さんどうしたら良いか分からないな。

「え、どういうことだ？」

と聞くと、智風は一回目をそらした後めんどくさそうにまたこっちを見てこう尋ねた。

「アンタ木に裸見られて羞恥を感じたことはある？」

「え、き、木？んな分けないだろ！あー分かったお前さてはアレだな？オレを変態だと思ってるな？」

「その点に関しては今更問題ではないわ。でもそうよね、羞恥は流石のアンタでも感じないでしょ？」

それと同じよ、アンタの行為なんて羞恥に値するものではないって古式は言いたい。」

「なるほどな、つまりオレの解釈が正しければオレは人間以下ということになるがファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

ちつくしよおおおお！何だコイツ等！何だコイツ等！！あーそう

ですかそうですか

オレは人間にすら思われてないと！そう仰りたいと！ちくしょう何だよ『美少女』って！

顔だけだよ恐えよオレの母ちゃん見習えよ。こんなオレでもずっと育ててくれてんだぞ？

ん？こんなオレ？まあいい、所詮お前ら顔だけか！

ん？でも待てよ？確か古式ちゃんとやらはオレがおっぱい触ってる
とき引ッ叩いたよな？

あの状況下でその行為は羞恥によるものと判断できる。

ってことは何だ、恥ずかしかったけど悔しくてそんなこと言っただけか。

何だよ可愛いところあるじゃんかこっちこそゴメンようえへへへ。

と、小学生にその笑いを向けてたら警察でも来そうな位の笑みを浮かべていると

『どうして早く駆除しないの？』というような分かりやすい殺意を向けて智風が尋ねてくる。

「アンタどうやってたら人間の骨格でそんな気色悪い顔ができるの？命を絶つことを勧めるわ」

と、言葉の核ミサイルを撃ってきた。コイツホントに容赦ねえなと思っただけの素直に理由を言っただけ。

古式にな。

「なあなあ古式ちゃんとやら、さっきはゴメンよ。そんなに照れ隠ししなくていいんだぜ？」

むしろ悪いのはオレの方なんだし」

と、中々の爽やかスマイルで言っただけだと古式は微動だにせず読書
を続ける。

まったくんだシャイニングガールだなあ。と思っただけ。

あ、ちなみに『シャイニング』は照れ隠しのシャイと輝く美少女の

シャイニングをかけてるんだけど
どうよ。と、一人でドヤ顔をしているとまたまた智風が話しかけてくる。

何コイツ？もしかしてオレのこと好きなの？

「アンタ勘違いとドヤ顔もそれくらいにしときなさい。マジで殴るわよ？」

とかってまたまた可愛くもないことを言う。はっ、お前オレが好きだか何だか知らないけど

素直になれよ。まったくしょうがないな、とか思ってみるけど勘違いってなんだ？嫉妬か？

おお、ヤベえなオレ、ついにモテ期か。しょうがねえこの可愛いこちゃんの嫉妬言い訳でも

聞いてやるか。

「勘違い？はっ、オレが何を勘違いしてるってんだ？ん？言ってみ？ほれほれ」

とコレ言われたら相手殴り倒しそうだなとか自分でも思ってしまうようなことを言っちゃった。

流石に言い過ぎたか？と思ってみてみたら素直に怒りを抑えていていつの間にか拳を握っている。

ちょ、洒落になんねえ！

すると彼女は目の前でとっておいたおやつを食べられて怒りに震えているみたいな状況から

自分の自制心のリミットを全開にしてなんとか怒りを堪えてこう言った。

「ア、アンタがあ……お、思ってるような甘い考えじゃないわ……」

このドちくしょ……いえ、……そうね、アンタ自分の目の前

で蚊が自分の血を吸ってたら
どうする？この力……いえ、折崎君」

と怒りを堪えているいるのがもうそれはそれは分かりやすい言動で
オレに問いかけてくる。

オレでさえ殴りたくなるあの言葉を耐えるなんて相当なストレスだ
よなあと人事で感じつつも

流石に無視したら窓からスローアウェイされそうなので答えること
にする。

「そりゃあ叩いて殺すだろ。殺さないで自分の血を吸ってるとこ見
てるとかマゾヒストかよ」

と得意げに言うと、何故か智風も得意げになったような笑みを浮か
べる。

「そうよねえ……殺すわよねえアンタを……いえ、蚊を。つ
まり古式が引っ叩いたのは
そういう事よ。」

「は？そういうことって何だよ。オレは流石に血は吸わないぞ？」
イヤ『流石に』ってのもおかしいか、うん。

「ホントに理解力が欠けてるのね……。つまり所詮アンタなんて
『あ、蚊が止まった。とりあえず
殺そう』位にしか思われない害虫と同じって事よ。イヤ、それじゃ
害虫に失礼ね。」

所詮アンタなんて『害虫以下の何か』って事よ。」

……

お、おうおうおう。ははっ、流石の空也（アキヤ）君も言葉を失っ
ちやっただぞ

あ、何？そういうこと？オレ害虫以下？

ははっ、雨・・・かな。何か水が落ちてきてる気がするよ。

そうして『嘘だろ？』と、古式の方を見ると何も感情を表に出さずにただ文庫本のページをめくる少女が。

その隣には勝ち誇ったような顔をしている少女が。

そしてオレのとなりはニコニコしながらずっとオレを見ている少女が。

さあ智風さん、説明を始めてもらおうか。

コレって何をするサークルなの？

#09 ミステリーサークル（前書き）

9 話目です！今回も頑張って書きました！
マターリと読んでやってください！

#09 ミステリーサークル

別にオカルトが嫌いってわけじゃない。

むしろ好きと言っても良いくらいだ。特に宇宙。宇宙は良い。

何が起こるか分からないし何より神秘的で綺麗だ。

その点ナスカの地上絵とかエジプトのピラミッドとか地上に関するオカルトはまったく興味もないとは言わないけど宙に比べればそれほどでもない。

だからオカルト研究ってやつはそういうのを調べるんだから悪くないんじゃないかって思ってたこと

もあった。3秒位。

イヤ何で3秒？何て普通のツツコミをされても今のオレなら優しく説明してあげるだろう。

理由は簡単。だってコイツ等オレのこと罵倒しかしてないんだもん！

マジで何だしチクショウ、確かにオレが悪かったとはいえ目の前の黒髪美少女はオレを

これでもかって位論破し、被害者の少女は気にして無いだとか何だか知らないけど

一言も喋らないで黙々と本を読んでるし。

何だソレ？無口がカツコイイと思ってるのかコイツは。全然カツコよくねえよ。可愛いよ。

そしてオレの隣の短髪ちゃんに関しては「初めて男の人を見ました！」「みたいな謎の興味をオレに向けてくるしこの状況からどうやってオレの想像する落ち着いて黙々と自分の興味を持った

オカルトについて調べる研究会になるのかと疑問と不安を隠せないんですがもう帰って良いですか？

それがトイレ行ってきたていいですか？

と、『考える人』みたいにウンウン悩んでると目の前の少女、智風（チカゼ）が荒々しく
持っていた冊子をオレに渡した。

「さ、今からこのサークルについて説明するから良く聞いてね」
「良く聞いてねじゃねえよその前に退部方法をオレに良く聞かせてくれよ・・・」

「この前ね、道で人にぶつかったの。いえぶつかったという表現では誤りがあるわね。」

第三者から見るとアレは『押し倒した』と見えていたのだから押し倒されたのよ私。

でもその相手は謝るところか謝った直後にヘラヘラ笑いながらナンパみたいなことを言い始めたわ。

正直同じ空気を吸ってると思うだけでむしろが走ったから適当なことを言って誤魔化して

私は先に行っただけど何だったのかしらねあの人の形をした何かは。確か固有名詞は折さ」

「うわわわわ！すいません何でもありません早くこの素晴らしきサークルについての説明を

聞きとってください」

「そう」

なーに今の目！あの満足したような笑み！ホントいやらしいわあ。と、女子高生の顔を見て

「いやらしいわあ」と思うのはいやらしいわあ。とかなりどうでもいい事を思っていると

智風は何事もなかったかのように話を切り出し始めた。

「私達ミステリーサークルでデフォルトは『調査』・『実験』・『証明』よ。」

個人個人で『疑問』や『猜疑心』を抱いたものについて『調査』し、そこから

『実験』へと繋げて最後にはその過程と結果から判明したことについての『証明』をするの。

すごく大雑把に言うところなところなのだけれど何か質問は？」

「はい！『女体』について『疑問』を抱いてしまい、そこから実験へと繋がる時に

どのような実験ができるんで」

「次の説明に移るわ。」

「はい！そこからどのような実験。イヤ、どこまで実験していいんで」

「静かにしてくれないかしら」

「・・・はい。」

「次に活動日や部費だけれど、活動日は・・・すこし待って」

と、自分のポケットから可愛い犬のメモ帳を取り出す。うん。似合わねえ。

「活動日だけれど、毎日よ。」

は？毎日？ふざけるなよ？あと何で毎日なのにわざわざメモ帳まで開いて調べてんだし。

アホか。それとも実は新品のメモ帳見せたかったのか？

イヤお前のその満足そうな顔見るとそうと思えないんだよ。

「質問はあるかしら」

「はい！毎日活動することですがとても毎日出席する自信がないので辞めてもいいでしょうか。
あとそのメモ帳は新品なんです」

「次の説明に移るわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「次に部費だけれど特に徴収しないわ。ただ自分がしたい実験の時にもしも費用がかかるなら
決められた範囲内なら学校からの活動費が出るわ。それでも足りないようなら自腹ね」

と、少女は髪をかき上げて得意げに説明をする。その姿はとても可愛くて、華奢な体で行う

動作一つ一つがその可憐さを作り上げていると言ってもおかしくは無かった。

しかし話の内容はおかしかった。イヤイヤ毎日とか。ははっ、最近の女子高生の
ギャグセンスは高いから困るよまったく。それじゃツツコミのセンスも高くなきゃ駄目じゃないか。

「活動日が毎日？なんでやねん！」

「何か文句があるかしら」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いえ」

アレ？オレのレヴェルの高いツツコミが地平線の彼方フライアウェイしちゃったんだだけ。

しかしこればかりは活動日が毎日の理由を聞きたいので諦めずに

ネバーギブアップ

と、意味の同じ単語を二つ使っていることに気づかずにもう一度拳手。

「はい！活動日が毎日とのことでしたが、そんなに毎日やるほどミステリーは周りにあるんですか！」

すると少女は顎に手をあて、何か考える姿勢に入る。そしてあまり時間をかけずにこう答えた。

「毎日。と言つても毎日調べたり実験をするわけではないわ。別に何もすることがないのなら

読書しようが宿題しようがそこは自由よ」

「じゃあわざわざ部室じゃなくてもいいじゃねえか。」

「その自由時間の中で疑問がぶつかれば部員もいるし部室のもいるしすぐに作業に取り掛かれる

でしょう？『発見』というのは意外なところからやってくるものよ。理論じゃないわ。

だから『とりあえず部室にいる』。この精神が大事なのよ。」

「いえ、僕は家の方が色々なことが思い浮かぶので帰ってもいいですか？」

「他に質問は？」

「・・・・・・特にありません。」

何なんだこのサークルただののろけの集団じゃねえか。

そりゃこんあサークルだったら顧問の先生だってすぐに取りられそうになるわな。

だって活動してない日もあります！って公言しちゃうようなところだもんねえー

逆にお前らはこれでどうやって一年間過ごしてきたんだし。
まったくホント死亡フラグさえなけりゃ・・・なけりゃ！こんなサークルなんか・・・。

「すいません、家庭の事情で明日からアルバイトしなきゃならない
んでもうこのサークル

続けられそうにないです。すいません。でも皆さんの暖かく優しい
心に少しでも触れあえただけで

幸せです。本当にありがとうございました。」

と我ながらカッコイイセリフを言い残して鞆を手に取り、教室をあ
とにしようとドアに向かう。

あばよ美少女達、中々楽しかったぜ またいつか会おう。アディオ
ス。

とドアを開けようとするとな人の少女が何かを語り始めた。

「そう、確か私を押し倒した変態存在猥褻物の固有名詞は折さ」

「さあ智風さん、次は何を話してくれるんだい？」

「自己紹介でもしておきましょうか。」

と、いつのまにかオレは席に座っていた。悲しいなあ。この服従感。
でも逆らったらマジで

抹殺されそうだからなあ。オレ防御呪文とか持ってないし。

すると智風は立ちあがって胸を張って言う

「この『ミステリーサークル』部長の智風時雨よ。はい次！」
チカセシゲレ

と、智風が隣の少女に目をやる。するとその子は文庫本を閉じ、睨

みつけるような目つきでこっちを見ながら

「この世界で存在する『人間』という生物の中で『私』という存在を差別化させるために
必要とする呼応記号は古門古式^{「カド」「シキ」}」

・・・何かとても面白いことをこの子は言っただけ。『古門古式』がこの子の名前かな？
うん。良い名前だね。うん。・・・ははっ。
するとオレの隣の少女が勢いよく立ちあがりそれはそれは大きな声でこう言った

「はいっ！！私は御巫紫苑^{ミカナキシオン}って言います！言うのです！！
さあさあさてさて！次は君の名前をぷりーずてるみいいいいい！！」

とかつて眩しくて直視できないほどの笑顔で笑いながらこの女の子は高らかに名前を紹介した。
君の名前をプリーズテルミーってオレも言わなきゃいけないんか。
何か徐々に溶け込んでいつてるみたいで何とも言葉にできないような又ワットとした気持ちなんですが
そんな心境の僕の自己紹介をどうぞ。

オリサキアキヤ
「折埼空也です。・・・まあ、よろしく願います。」

#10 オカルトの始まり（前書き）

皆さんのおかげでついに10話まで出すことができました！
ありがとうございます！

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！

#10 オカルトの始まり

自己紹介的なものが終わり、いよいよ何をしていいのか分からなくなってきた。

どうしよっかなあと思ってあたりをぐるりと見回してみる。

俺の正面に座る少女のほうを見てみるとむすっとしながら本を読んでいる。

うーん・・・今はそういう展開だからそんな顔をしているんだろうか。

それとも俺がじっとり生ぬるい視線を送っているからだだろうか。

どちらにせよこのままだと言いがかりをつけられそうなので視線を隣の少女に移す。

すると少女は何やらルーズリーフに書き込んでいる。

確かさつきまでは本を読んでいたのにいきなり何をはじめたのかなあと思って覗き込んでいる

と『人体発光実験』というタイトルの何やらレポート的な何かを書いていた。

そういえば確かさつきも俺がやつちまったときに何か実験をしていたとか言ってたなあ。

と思って説明を求めようとする。

「ちか・・・」

チカゼ

と俺は智風の名前を途中まで呼んで停止した。

どうせアイツのことだ。また「そんな事自分で調べたら？そして死ねば？」

みたいな感じでとりあえず批判からはじめるに違いない。

まったくそんなに俺のメンタルが強いと思うなよ？

強風で壊れちゃうからな？世間の風当たりという名の。

そこで恐ろしい少女とレポート少女は置いておいて、隣の御巫ミカナギに聞いてみることにしよう。

「なあ御巫、アレは何だ？」

と、古門コカドの書いている方を指して問いかける。

するとニコツとそれはそれは可愛い笑顔浮かべて

「んん？ルーズリーフって言うんだよ！元々切り離されているノーマリみたいな物だね！」

「え、・・・ああ。へ、へーハジメテシッタヨ。」

駄目だ。笑顔は可愛いけど回答が可愛くない。

たぶん本人にも悪気はないと思うんだけど、逆に悪気があったら俺は嫌われてるな。確実に。

そこでもう思い切って古門自身に聞いてみることにする

「なあ古門、今何書いてるんだ？」

すると古門はこっちをキツと睨みつけた後ハアと短くため息をついてから作業に戻る。

・・・・・・作業に戻る。

何この空気。俺何かした？したの？したか。

でも気にするな的なこと言われたしなあ。と思っていると古門は小さく呟くように

「『発見』・『実験』・『証明』の『証明』のフェイズ。」

おおっ、そ、そうか。実際に発見してどんな実験をしていたかが

分からないから何とも言えな・・・
フェイズ？まあ、いつか。

とりあえず実験の後にはあんな感じで簡易レポート書かなきゃいけないのか。

何かメンドくさいな。まあその前にまずその『発見』ができるかだよなー。

でも『人体発光実験』って何かすごそうだな！こんな小さそうなサークルなのに

何だか大規模な実験もできるのかな。どちらかというと理系な俺としてはかなりそそられる。

するとレポートができあがったのか古門が席を立ち、智風に渡す。すると真面目な顔でそれを読んだ後、「じゃあ後で先生に渡しておくわ。」

と一言。そして古門はコクリと頷き、二人揃って読書を始める。

ちなみに俺の隣の御巫は宿題らしきものを進めている。
本当にやることがないと暇なんだな。

んじゃあ俺も読書でも始めようかと思ってみたが、やはり気になるのはあの実験。

もう正直ソワソワが止まらないしロマンティックも止まらない。

よし。できたてのレポートを見てどんな感じが把握するでしょう。

「智風、ちょっとそのレポートを見せてくれないか？」

「断るわ。」

「何でお前は否定から始めるの？」

「冗談よ。」

おいおい顔が冗談じゃねえんだよ顔が。怖いっつーの。元は可愛いのに何でこう、ね。こういうことしちゃうかね。

と、智風からレポートを受け取る。綺麗に並べられた文字の羅列を舐めまわす様に見通す。

『人体発光実験』

必要なもの：懐中電灯、下敷き

実験方法：気合で自分の体から生体電気を外界へ放出。また下敷きで静電気を使い、発生の補助など』

と、その後にも同じような事が書き連ねてある。

正直にいうと、こんな眼を持つてるから何とも言えないけれど

「実験じゃねえじゃねえか！！！」

「五月蠅いわね、大きい声を突然ださないで」

「うるさいじえねえ！これがツつこまずにいられるかあああ！」

といつのまにか怒りをあらわにしていた。

なんだコレ、何の実験だよコレ！人体発光って確かに何かすごい実験を大々的にするのかな

とかってこのサークルの凄さを少し認めようかとも思ってたのに何だ『気合』って！

んなもんで発光できたら街灯はいらねえ！

「貴方は『科学実験サークル』とでも思っていたのかしら。ここは

『ミステリー』サークルよ。
科学的実験をしてどうするの？サイエンスじゃない。オカルトじゃないわ。」

「だとしてもその『オカルト』を現実的な科学でどのように
いるのかを証明するのが

ここでいう『実験』じゃねえのかよ！」

「違うわね。実験題材がオカルトなら実験方法もオカルトよ」

「ドヤ顔でいうんじゃない！今までこんな活動してたのか？もし
うならよく続いたなど

褒め称えてるところだ！」

「確かに科学に頼った実験をすることもあるわよ？そして褒め称
えようだい。

こんなんで一年活動したわ。というかこんなんでつて何よ。」

とムスツとした顔になる。正直このサークルがここまで存在でき
ていたことの方がよっぽど

オカルトだ。確かにサークル名に沿った活動をしているが証明方法
までオカルトでどうすんだ！

とツっこみたいところだが新参加者が何言ったところで所詮聞いてく
れないだろう。

イヤ、俺が何言ったところで聞いてくれないの間違いだな。

さてどうしようか。ここでのサークルライフは。

もう最初からオカルトすぎてマジオカルトなんですけど。

こうして美少女のオカルトによるミステリーサークルの活動は始まった。

#11 折崎家（前書き）

新章突入です！

下手くそな文章ですが、一生懸命書いていきますのでよろしく願います！

#11 折崎家

部屋の中には朝の暖かい日差しが差し込む。

正直綺麗とは言えない部屋に一人中学生、いや小学生ほどの女の子はとて

という音が似合いそうな足どりで入っていく。

そして一枚の布団をめくり、綺麗なソプラノボイスで

「お兄ちゃん、朝だよ！お姉ちゃんが朝ごはんもうできたよって！だから起きてって」

この可愛い・・・いや、「可愛い」などという表現では到底表しきれないような少女は

何を隠そう俺の妹である。サラサラの綺麗な短い黒髪。ななめに分けられた髪を一点で結わえてある。

細く白い華奢な体。そんな素敵な妹に朝起こしてもらうなんて男子が好きなゲームにありがちな設定

だろうけどやったね現実だ。そんなすばらしき朝の出会いをくれた妹に優しく微笑みかけ、

「おはよう俺の天使。今日も可愛いね。」

「んなななっ、ちょ、お兄ちゃんなな、何言ってるのもう・・・」

「

俯きながら言う。日差しが部屋に入ってきているから分かりづらいけど、この角度からなら

顔が赤くなっているのが分かる。本当にこのエンジェルったら。

「と、とにかくちゃんと起きてよねお兄ちゃん」

そう行つてパタパタと部屋から出て行つてしまふ。

こんなに素晴らしい妹がいる家が最近本当に恋しく思う。

できることなら学校なんて行かずにずっと家にいたい。そしてピッキングして妹の部屋に入りたい。

それが無理ならせめて放課後はすぐにでも帰路につきたい。

そんな考えをもたらしてくれるようなサークルに俺は所属している。

妹は良い。俺が以前やったゲームで再認識したよ。

しかし昨今の高校生男子諸君は「綺麗なお姉さんがいい!」、「あのふとももがいい!」

などとたわけたことをほざいているがそれは間違いだと早く気づいてほしい。

第一ふとももが良いと感じるのはそれに相乗効果をもたらす「絶対領域」があるからで、

世間一般でいう「綺麗なお姉さん」がジーンズをはいていたらどうだろう。それでも「最高!」

と胸を張れるかいチエリー達。おっぱいを見るおっぱいを。

おっぱいならばどんな状況下であれ出ているものが出ている人ならば何を着ていても自然と

出るだろう? エロスオーラが。

しかし俺は水着よりも断然浴衣を押す。なぜなら浴衣は胸を強調させるだけでなく、

あのゆつたりとした着こなしの影に時折見せるあのふとももがたまらん。うひょー。

なんて夜考えればいいテーマを朝っぱらぶつ放している。中々に頭の冴えた目覚めの良い朝だ本当に。

しかしさっきの難題に戻るがいつのまにかお姉さんがいいなんてことになってるが根本からして

俺は断然妹派だ。理由なら言い切れないほどある。まず

「空^{アキヤ}也きゅうううん！！！！いつまで寝てるのおおお！お姉ちゃんさ・み・し・い」

こんなのが姉じゃ好きになれという方が難しいということを理解してほしい。

そして朝から抱きつかれるのはやめ・・・うつ、息できな・・・。

「姉ちゃん苦し・・・はな・・・」

「んじゃあ私の熱い口付けを、んむちゅうう」

「うわあああああ！げほっげほ、それは勘弁・・・うえ」

「お姉ちゃん駄目っ！」

天使が悪魔を押し倒す。まったくなんでこんな朝から天界大戦争になってるんだ。

「もうコノちゃん何で邪魔するのぉ！もしかしてコノちゃんも空（アキ）ちゃんの口付け狙いだっただの！？」

「ち、違うつてばもう！お姉ちゃんもお兄ちゃんも遅刻するよ！」

赤面した天使もやはり可愛いけど姉ちゃん、あんたは違・・・

「んもう空ちゃんったら！早くした来てね。コノちゃんもよ」

ほらな。こんなんじゃ妹が好きになるだろ？

だから今のところお姉さん属性の方は中々に好きになれないんだ。

今までもこんな感じだからよく言えば慣れた。悪く言えば慣れた。

階段を降り、朝食をとる。相変わらず静かに食事はできないけれど我が家はこんなだから仕方がない。

この時代でも研究者って職業は生きていて、両親がその職業である。なんでも天体を観測するとかっていう中二心まるだしなのだが、好きなことを職業にできているってのは普通に凄い。

でも流石に職場はアメリカなので二人ともほとんど帰ってこない。

だから姉ちゃんがほとんどの家事をすることで今の折崎家は成り立っている。

正直俺はもう慣れてしまったが妹の木葉コノハはやはり寂しく思うときに俺達よりも多くあるらしく、時々寝言でそんなことを呟いている。え？何で部屋違うのに寝言が分かるのかって？いや、ほら、あれだよ。

リビングで昼寝してたときだよ。もうそういうことにしといて。

「お兄ちゃん！早く行こ！」

でも安心してほしい。君には君の事をずっと思っているお兄ちゃんがいるってことを。

いつでも大切に思ってるってことを。だから寝顔を覗き見してたのを許してください。

「ああ、今行くよ」

玄関の扉を開け、走って駆け出す。

雲とかくれんぼしてた太陽がひよっこり顔をだして俺達に暖かい光をあててくれる。

風は南に吹いていて、夏の近さを感じさせてくれる。

隣では向日葵のような笑顔を浮かべた少女が楽しそうに話しかけて

くる。

こんな朝は空を仰ぎながら歩くにかぎる。

．．．．．あつ

「どづかしたの？お兄ちゃん」

「．．．．．鞆忘れた」

#12 青色と赤色

「朝から騒がしいわね」

冷たい言葉の弾丸が胸に命中する。

小さくため息をつき、長く美しい黒髪をなびかせた後、透き通るビ
ー玉のような瞳は再び文庫本へと
向けられる。

俺だって好きで朝からこんなに大爆走したかったわけじゃない。
可愛い妹との登校タイムを逃してまで今日の授業のためにわざわざ
靴をとりかえたらいい。

逆に偉いだろ、と息を切らしながら隣の席である智風時雨^{チカゼシグレ}1に言う。

「あなたって馬鹿の上に変態なのね」

「ん？ちよつと待て、何で今の会話から俺に変態というレッテルが
貼られるんだ」

「その自覚がないあたりよ」

それからは何言っても無視だった。この子がどうやって育ってきた
のかは知らないが無視はよくないと思うよ。

現に今だって君の前の男子生徒が眼に涙を浮かべているだろう？誰
かとは言わないけどさ。

靴を置き、席につく。この朝の時間帯の過ごし方は大体二種類に分
けられる。

智風のように読書をして静かにしているやつと

「昨日のマジ マジみたあ？」のように友達とくだらない話をする
やつ。

大半の生徒は後者で時間を潰すが、俺は読書派だ。

読書はいい。何より面白い。世界を救うベタな話も設定が凝っていて面白いし、ラブコメなんかもキャラクターが可愛くて文句無しだ。そういうかつこよかったり憧れたりするような非日常が自分の周りでも起きてくれないかな。何て読み終わるたびに思ってしまう。

ここでポイントなのは『かつこいい』だったり『憧れる』ような非日常が起こってほしい。ということである。

体内の生体電気を外界に放出させようとしたり、自分の死に際が見える眼を持っていたりするような非日常はかつこよくないし憧れない。むしろいらない位だ。

でもかつこよくなくても、憧れなくても、少しでも当たり前とは違うことを見つけよう。

探求していこうという志を掲げるサークルに俺は所属している。

「うつす空也」
アキヤ

短い髪に、いかにも運動が好きそうながたいの良い体。初見だとヤンキーに間違われるのも頷けるそいつに俺は話しかけられた。

「すみません、何円払えばいいですか」
「おお、おはよ……ん、払うって何だ？」

この男伊上匠イガミタクミは腐れ縁よろしく何と中学1年の時から同じクラスの友達だ。

自分で言うのも何だが俺はあまり友達はいないほうだと思う。

何故かは分からないけれど大好きな女の子達とお話すると用事があるからと言ってどこかに行ってしまふ。他の女子にも同じように断られ、まともに話ができない。

俺が話そうと思う女子は皆予定が何かしら入ってるんだから運が悪い。最近の女子高生は

忙しいんだなあと思い、次は男子とトークでもしようと話しかけてみるものの

中々に話しづらい。２メートルも離れないでよ。

だからそう考えるとここまで普通に話せる男子はコイツ位で、女子でまともに話せる子はいない。

いやいや智風さん達は「まとも」リストに入ってないからね。言い間違いじゃないよ。

だから流石に不思議になって何で皆のＡＴフィールドはそんなに強いのか？

と匠に相談したことがある。

さして匠の話によるとこういうことらしい

「女子はお前の話題についていけない・・・イヤ、いきたくねーんだと。お前どんな

話してんだ？」

とのこと。うーん。女子からしてみたら巨乳と貧乳はどっちが良いのか意見を聞きたかったんだけど

流石に自分に付属しているものについての話はイヤなのかな。

「んで男子はお前といると自分まで女子から変態に思われるからイヤなんだと」

「失敬な！男子は皆変態だろ！なあ匠！お前もおっぱい好きだろ？そうなんだろ？」

何？尻か？尻なのか？尻でもいいぞ！とにかく好きなんだろ！」

「なるほどな。男子陣の判断は賢明だったと言えるな。ちなみに俺は尻派だ。」

と謎の納得をしたが俺はいまだに納得してないぞ！説明しろちくしよー！

そんなことを思い出してみる。でも今はクラス替えの後、新たな出会いと青春を求めて

俺もまだ歩みを止めるわけにはいかない！まっ、たったさつき智風に変態呼ばわりされたけどな。

後智風さん達は「新たな出会い」リストに入っていないよ。言い間違えいじゃないからね。

「なあ空也お前そろそろ部活とかサークルに入ってみたらいいんじゃないかね？」

もう二年なんだしよ。無理にとは言わねえけどさ」

「入ったよ匠。イヤ、あれは致し方なく入ったというべきかな」

そうとも忘れられるわけがない。あの時『死亡フラグ』なんて立たなかったら俺はあんな

サークルに入らなかったのに！

でもこの眼がなかったら死んでたかもしれないからな。イヤ本当に精神的につらい。

崖に家建てて暮らすようなもんだぞどうしてくれる。

「まあなんにせよお前が引き籠もりから脱出してきて良かったよ。んで何部に入ってたんだ？」

「言つても多分陸上部の君には分らないと思つけど・・・」
「いいから言つてみるつて」

「・・・み、ミステリーサークルつてとこ・・・」
「み、ミステリーサークルっ!？」

猫が猫だましにあつたように眼を大きく開き、素で驚く。

はたして彼は俺が何かに目覚めてしまったとかそういう何とうかあれな勘違いをしているのだろうか。

「お前・・・」

と言葉を切り、チラつと横目で智風を見ると、急に小声になり

「お前ミステリーサークルつつたら美少女の園じゃねえか!今まで男子禁制の噂がたつたのに
まさかお前がそれを打ち破るとはな。」

「えっ・・・」

絶句。まさか俺が入ったサークルがそんな脚光を浴びていたとは! イヤだつて女子も男子も全然話してくれないんだもんそりや分からないよ・・・。

確かに仕方なく入ったつちや入ったがこんなおいしい展開になるとはな。

という意味で絶句したわけではない。

確かに驚きはしたが絶句の動機は他にある。

確かにあいつらは美少女だ。悔しいがそこは否定しない。

しかし皆はアイツ等の恐ろしさつてもものを知らない!

騙されてる！

一人は脅しをつかって無理やり入部させてくるしもう一人なんて何言ってるのか分からない！
でも罵倒されてるってことは分かる！

あともう一人は・・・まああの子はいいや。

とにかくここはせめて俺の話を聞いてくれるコイツだけでもなんとか救い出してやらねば！

それが男、それが友達つてもんだ！

「良く聞け匠！あいつは・・・智風は俺が押し倒したのをいいことにサークルに参加させたんだ！

あいつらはただの美少女じゃないんだ！」

高らかに叫んだ。匠だけじゃない。この教室の空気そのものが死んだ。

微かに聞こえる「えっ、押し倒したって何」「嘘だろ・・・変態変態思っではいたが・・・」

「ぼ、僕の智風さんに手を出すなんて許せないんだな」
なんだ最後の。

あー、これはまずい。イヤ昨日買い食いしたあのきなこパンもまずかったけどあの味覚的な意味じゃなくてまずい。

刹那。自分が宙に浮いた気がした。そして強くつかまれる襟元。締まる首。駆ける少女。

随分かつこよく表現したけど早い話襟をつかまれて教室を引きずり出され、

いつのまにか屋上に拉致られた。最近の女子高生は忙しいだけじゃ

なく腕力もたくましいらしい。

見るとそこには耳まで真っ赤に染めた黒髪美少女がいた。

「あ、アンタよくもあんな大勢の前であんなこと・・・」

「何言っただ智風。押し倒したのは俺なんだから評判下がるのは俺だと」

「そうじゃないわよ馬鹿あ！」

智風がこんなにも大声を出したのも動揺しているのも初めて見た。

いつもの智風なら「ここで何も言わないで死んで頂戴」

とかって冷淡に済ませると思っただけどまさかここまでの衝撃を与えてしまうとは。

しかし何だ、まあ確かにさっきのこと押し倒し事件のことも悪いのは俺だからなんとも言えない。

でもなんとも言えないじゃすまされない。

傷つけてしまった少女に何もしてやれないじゃすまされない。

しかしどう声をかけていいかも分からない。何せ女子とそんなに話したことがないんだ。

経験値も。配慮も。思いやりも、何もかもが足りない。

「確かに私もそれを使ってアンタを勧誘したけど・・・」

わ、私だって押し倒されたことなんてなかったから死ぬほど恥ずかしかったんだから・・・」

最後の方はもにゅもにゅしていて何言ってるか分からなかったけど

とにかく何とかしなければいけないと思う。

もちろん智風自身をなんとかしてあげたいと思う。でも残念なことにそれだけじゃない。

それだけじゃないんだ。彼女の・・・智風の頭の上には光り輝く旗、死亡フラグが見える。

だからこれは智風のためだけじゃない。自分自身のためでもある。

相手にプラスの感情を与える。これが正しいのかどうかよく分からないけど

勝手にそう決めてそうやってきた。

でも今回報かりは何をしてやればいいのかすら分からない。それなのにプラスの感情を与える事なんて皆目検討もつかない。

何をすればいいか分からない。なら、それでも智風をなんとかしたくて

それでもフラグを折りたいなら。もう・・・

相手に決めてもらうしかない。

「智風・・・あのさ」

「何よ、別に気に病んでなんかないわよ！もう行きましよ。

あ、でも・・・一緒に帰るとその・・・あれだから折崎・・・・・・・・先に帰っ」

「聞くよ」

「えっ」

「智風の言うこと何でも一つ聞くから。それでさっきのはゴメンにしてくれ」

自分でも理解しがたい日本語だと思ってしまっただけテンパって何言ってるのか良く分からなくなっただけ、少女は顔をまた耳まで赤く染めて俯いた。

何をしたいのか分からないなら智風自身が自分が一番してもらいたいことを選んでもらうしかない。
それでまたいつもの智風に戻るのなら。

智風は俯いたまま俺の隣を過ぎる。

シャン・・・とガラスが割れる様な音とともに旗は消え、一瞬だけど

笑っていた気がした。

#13 色々な意味で社会的ペナルティエリアは大事だと思います（前書き）

今回も頑張って楽しく書きました！

感想などがありましたらお気軽に書いてやってください！

#13 色々な意味で社会的ペナルティエリアは大事だと思いました

時は金なり。

時間というものはとても大切なものでお金よりも価値がある。ということだ。

例えば授業というものがある。

朝早く起き、決められた時間内に学校へ登校し、そして始まるのが授業。

朝から夕方までみっちり、延々と勉強を続ける。

このとてつもなく長い時間を例えば、本当に例えばだけど家族のための時間にするのはどうだろう。
確かに勉強も大事だけど、かけがえのないもの。ずっと大切にしていけるべきもの。

そんな大事な大事な家族のために時間を使ってもいいんじゃないかなとも思える。

例えば、本当に例えばだけど妹のために時間を使うとか。

いや別に『妹』という単語が出てくるだけでなんかいやらしい感じになるけど決してそういうのでは

なくて純粹に愛を捧げるということ、で別に下着のしまい場所を調べたりだとか変な男と親密な

仲になってないかとか秘密の日記帳に『お兄ちゃん大好き』なんて書かれてないか

とか兄として知っておくべき当然のことを把握しようとしているのであって

あの智風さんチカゼその鋭く俺に向けられたシャーペンは何ですか。

「私の隣でそんな汚物みたいな顔しないでくれる？次やったら刺すわよ」

「ちよつ、いつもより言葉の弾丸が強くない？何？ハンドガンからシヨットガンにしたの？」

なぜか彼女はおもむろに定規もとります。ステンレス製の角が尖っててキュピーンってなってるやつ。

美少女にシャーペンを突き刺される仲になれるんだぜ隣の席つてすごいだろ！

そうそう妹の話をしていたら家族愛の強い俺はあふれ出す愛情が滲み出て顔に出ちゃってみたいだね
てへ

「先に行くわねゴミ童貞」

「あの人が傷つく事実を簡単に言わ——」

黒く綺麗な髪をなびかせてスタスタと教室を後にしてしまう。
時刻は長針さんがちょうど真上を向いた午後4時。

ホームルームが終わり、部活やサークルの始まる時間だ。まあ前の俺なら帰宅時間ってことになって

ただだけ色々わくわく楽しい出来事があって今はあるサークルに所属している。

まあもう高校二年生だからね。何かを始めてみようと思ったんだ！
なんて素敵理由だったら

心の持ち方も変わってきたんだけどほら色々わくわく楽しいことが
楽しすぎて

そんな気持ちになれないんだよね！テンション上がりきって一周回
って地に落ちたかんじかな。

地についたものは地についたものらしく重い足取りで部室へと向か
う。

『ミステリーサークル』

それが俺の所属しているサークルだ。気づかない人はこんにちわ、
気づいた人はさようなら。

見ての通りこのサークル名だけじゃ何をするサークルかも分からな
い。

しかしつい先日活動詳細が明かされた。

説明を求めなきゃどんなサークルか分からないからメンバーも集ま
らないんだよってこの前言ってみた

んだけどあの時は切っ先の鋭い三角定規だったね。

なんでも不思議^{オカルト}を見つけ、調べ、立証するというインチキ臭^{オカルト}ばりば
りの文学的サークルだ。

ちなみに活動日は毎日。な、この時点で疑問^{オカルト}だろ？

と言いつつ部室に向かつてる。こんなこと智風にいったら八つ裂きに
されそうだな。

部室に入るとすでに2人部員がいた。

綺麗な黒髪に吸い込まれそうなほどの透明さを持つ瞳の智風、

明るめの長い髪に蒼く澄んだ宇宙を思わせるような眼を持ち、読書コシキをしている古式。

後もう一人いるんだけどまだ来てないみたいだ。

しかし本当に暇だと皆思い思いのことをするんだな。読書にえっと智風は宿題？

とりあえずこの状況は『やることはありません』の意思表示そのものだ。

第一そんなにやることないなら活動日毎日にしなくてもいいのに。なんて当たり前なことはもう

すでに何回か言っただ。

しかしことごとく拒絶され……まずあれ会話成り立ってたっけな。

まあ入ってしまった以上もうこのルールに従うしかない。

おもむろに鞆から本を取り出す。今日はこの「いつのまにか救世主」を読むとしよう。結構面白いんだよな。特にこの主人公の妹が俺の妹に似てるところがうえへへへ。

この巻はその妹が魔王に殺された兄を救うべく妹の冒険中心に描かれてるんだけど

この兄想いなところがたまらなくたまらないよね。木葉コノハも素直に甘えてくれたら

いいのにどうしてか最近思春期、いや反抗期なのか一緒にお風呂も入ってくれない。

「も、もう高校生なのに一緒におおお風呂なんて入るわけないでしょお兄ちゃんのバカあ！」

と、耳まで真っ赤にして走り去っていったのが昨日のこと。
お兄ちゃんは最近とても寂しいよ？

でもどんなに怒鳴られても嫌がられても俺の愛は変わらないどころ
か最近罵られるのが

気持ち良いかもなんて思う時もあるんだけど社会的ペナルティエリ
アはもう超えてしまったかな？

と妹想いにふけていたらすっかり読書を忘れていたよさあ読むと
しようと思ったところで

そのコンパスは何ですか智風さん。

「二度と。二度とその顔面汚物を公共の場に晒すなと言ったわよね」

「いやいや待て待て今俺はいたって普通の表情だったぞ！それでも
そんなことを言われると

なんかもう標準状態が汚物みたいって悪口に変換されるんですけど」

「何よ今更そんなこと。生まれつきは変えようがないわ」

「うわーん俺の母親に謝れー」

「まずその気色悪いニヤニヤをこちらに向けて放ったことに謝罪し
なさい」

コンパスを片手に言葉のナイフでザックザック切ってくる。やめて
智風さんそれ以上

やるとただの肉片になっちゃう！

ゆっくりとコンパスを筆箱にしまい。お次は鋭いシャーペンをお手
に持つ。

うわやばい！と身構えるとそのシャーペンを俺の変わりにノートへ
と突きつける。

ああノートよ。お前も災難だな。なんて思ってみたりして俺も読書に移る。

いや移りたいんだがさっきからチラチラ視線が針に刺されるみたい
にチクチク刺さる。

できるだけ気づいてないフリをしようと思って黙って続きのページを
探すけどいかんせん気になってページをパラパラ何往復もさせるだ
け。ううんむずがゆい。

「何だよさっきからチラチラ見て！どうしたんだ？」
「ひゃあう！」

と小動物みたいに一瞬飛び跳ねる智風。なぜか顔を赤らめてオドオ
ドしながらこつちを
上目遣いで見つめてくる。

綺麗な透き通った瞳。ビー玉のようで真珠のようで。でもどこか海
面に反射する太陽の煌きのような。

さっきまでとは明らかに違うその目をただただ見惚れて釘付けに。

すると鯉みたいに口をパクつかせる。コイツは何が言いたいんだ？

「いや、その・・・わわ私を見てそんなにき、気持ち悪い笑顔浮か
べるから・・・」

その何考えてるのになって・・・」

パクつかせた後はもにゅもにゅした口ぶりで話してくる。

さっきの悪口みたいにハッキリ言えばいいのにどうしていきなり赤
面してそんなこと言い出すのか

よく分からなかったけど適当なこと言ったら今度こそコンパスの針

の方がプスツつといきそうなので
自分の身を案じて本を閉じて智風に向く。

「何考えてたってそりゃ俺のいもう——」
「やつほ——————！」

バンツつととつもない勢いで開かれるミステリーサークルの扉。
全員がビクッと驚いていつせいに扉の方を見る。

そこには肩にかかる位の長さで、茶色がかった髪にネオンみたいな
とつともなくキラキラした眼と
その片手には謎のピンク色の長方形をした物体。

もうひとりの部員、ミカナギシオン御巫紫苑がじゃじゃーんという効果音がピツタ
リ合いそうな
感じで登場しておられた。

「遅くなってゴメンに！今日はねオカルト研究材料を見つけてましてね！
そいつを調べるためにダッシュで友達から借りてきたって寸法よ！」

と自慢げに言いながら片手のピンク長方形をヒラヒラさせる。
全員唖然としている中一際テンションの上がった少女が一人。
もちろん全員の視線は虫眼鏡で光を集めるがよろしくそのヒラヒラ
させているものに一点集中していた。

全員が言葉を発さなくても「何を調べるの？」という視線を御巫に
注ぐことで余計な
手間は省けた。

御巫はエヘンと咳払いをした後、ピンク長方形を両手に持ち、こっ
ちにじゃじゃーん！

という効果音が似合いそうな格好で見せてくる。

「今回の私のお題はこれ！『同性愛はたして本当に非難されるべきものなのか！？』！

というわけで私のクラスのメガネっ子ちゃんからこちら、『禁断の果実アップル アップル』

というゲームを借りてきやしたあ！」

満面の笑みで高らかに宣言する。御巫の綺麗な声が部室に響き渡った。

#14 対象年齢18才以上（前書き）

今回は長いと思います！

BLゲーム編前編です！

楽しんで読んでくださると嬉しいです！

#14 対象年齢18才以上

原点は。

生命の始まりの原点はエデンの園にいるアダムとイヴだったと言われている。

雄の原点である『アダム』、雌の原点である『イヴ』。

個人的にはこういう神がかったオカルト話は結構好きなので

やる気はなかったけどもしも自分もミステリーサークルの一員として何か調べるとしたら

こういうオカルトを調べてみようと思ってるんだ。

そうそうここで気をつけてほしいのがアダムとイヴは男と女ってところなんだ。

でも俺の目の前でピンク長方形をブンブン振っている少女がもっているのは

どう見てもアダムが二人イチャイチャしたパッケージが見えるんだけど

はたして旧約聖書が間違っているのか俺の視力が悪いのか。

多分旧約聖書が間違ってるんだなそうに違いない。

「では早速やってみましょーー！」

と元気に宣言すると、中々でかいテレビの電源をつける。

こんな小さなサークルにしては不釣り合いなほど大きい薄型テレビなのですごく

不思議に思った。やることないから部費とかこっちに回してるのかな。そして回り始めるディスク。

チカゼ コシキ
智風も古式も言葉が出ずに立ち尽くしている。

ように見えたのはさつきまでで、そそくさとテレビの前に1、2、3、4つ椅子を並べる。

「お、おい智風止めなくて良いのか？あれはあんまり良い内容のゲームじゃないと思うんだけど。」

「ととと止めないわよ。だってだってひ、人の探究心は海より深く空より高いのよ」

「動揺するくらいなら止める！」

「だってそれを不思議に思ったんじゃないじゃない。不思議を調べるのが私たちなんだから。」

そう言つて智風は席に着く。

そういえばたまたまこのミステリーサークルの実験に出くわしてしまったときも

確か古式と御巫^{ミカナギ}二人で実験してたんだっけな。

そう考えるとこのミステリーサークルの実験とやは基本的なその場にいる全員でやるものってこと

なのか。それで活動日毎日とかどんな実験も皆でやりましようって言ってるようなもんじゃないかなんてこつた！

端から順に御巫、古式、智風と座っていき、一番端の席があまる。

はたして、イヤやはり俺もこれは参加するべきなのだろうか。いや俺は全然女の子が好きだ！

アダムだけなんて考えられない！せめてイヴ同士にして来てくれたらよかったものを

どっちにしる内容によっては気まずい空気になる！エデンから追放される！

ん、内容？

「御巫、ちょっとそのソフトのパッケージ見せてくれないか」

「うんにゃ、はいよー」

みるからにパッケージにはバッチリとアダム同士がいちゃこらしていた。

もう今更そんなことはしょうがないので最後の社会的ペナルティエリアをこのソフトが犯してないかだけ確認することにした。

そう、最後の砦『対象年齢』だ。

確かにもうパッケージからしてBボーイズラブLものなんだろう。

しかしその中でも対象年齢15歳とかだったら少し特殊な恋愛の一つの形として

ギリギリのところで最悪の事態は防げる。そうしてらこの空気がこれ以上冷めることはない。

・・・・・・と思っていた時もありました。

『対象年齢18歳』となりにはセクシャルマーク。

「ありがと御巫」

そういつてパンドラの匣を御巫に手渡す。

智風たちの方を見るともう顔が真っ赤だった。無表情しか見たことのない古式も

ここからだと言に朱をさしているように見える。

隣に座って智風を見る。俯きながら何か心の準備をしているみたいに緊張感が伝わってきた。

「何でわざわざ皆でやる必要があるんだ？」

ニコニコしながら着々と準備を進めている御巫に聞こえないようにたずねる。

「だって、ひとりでやったらただの主観的な個人実験になっちゃうじゃない。

後で皆で討論して結論を出すためにもみみみ皆でやるのが大切なのよ」

「ええっ！これを討論するのか！？」

「うるひゃい！」

智風の叫びとともにオープニングムービーが流れる。

「おお！始まりまった！大丈夫だよ時雨ちゃん古式ちゃん！きっと楽しいから！」

「そ、そう？たたた楽しみだわ。ね、古門！」

「う、うん。」

そう言つて二人は画面を向く。

何だかやけにキラキラしたオープニングムービーの後にタイトルが現れる。

御巫が『ニューゲーム』を選択し、名前の入力画面になる。

「うーん、時雨ちゃんも私も古式ちゃんも全員女の子だからねえ、

ここは男子の空也^{アキヤ}

君の名前にしようっか！」

「ちよつと待て！ここは無難にゲームを進める御巫の名前でいいな

じゃないか！」

「ええー、それじゃゲームに感情移入できないよー？」

ばっかやろう！俺の名前でBLEゲームやって感情移入されても困るんだよ！

R18ってことはゲームの中の俺がおそらく……駄目だ。阻止だ！

「まあまあ俺の名前なんてやめてゲームように名前でも作つ――

――」

「うるさいわね。あなたの名前でいいでしょ？」

とお隣の席の智風さんがナイフのように鋭い眼で睨みつけてくる。え、何お前のそのソワソワした顔。早くプレイ画面に進みたいの？さっきまでも羞恥心どこにいったんだちくしょう！

「わ、分かったよ俺の名前で……」

「それでいいのよ。」

と満足げに智風が言うと、なぜかまた顔が赤くなっていた。

コイツは何考えてるかまったくわかんないな。分かるうとしてもポコポコにされるのは俺だしどうしようもないけどな。

「うし！んじゃ始めー！」

そういつて悪夢^{ゲーム}が始まる。

『やあこんにちは。僕は空也！この林檎学園に通う高校二年生なん

だけど。

僕は少し変わった部活に入ってるんだ！それはね・・・おっと部活の先輩だ！』

と空也青年の背後からがたいの良い青年が現れる。

『よお空也、こんなところで何してるんだ？』

『あ、こんにちは先輩』

おいおいちょっと待て『こんにちは』じゃねえよ空也青年。お前の先輩とお前の距離が

明らかに近すぎるだろ。待て待てよく考えてみる。男だぞ空也。女ならまだしもその距離は

カップルぐらいの距離だぞ。まあカップルなんていたことないから分からないけどね！

そんなこんなで学園生活が進んでいく。そして部室のシーン。

結局何の部活に所属しているか明かさないまま部室の前まで来る。

そして主人公が部室を開ける。

『ここが僕の所属している部活、筋トレ部だよ！』

一同騒然。御巫笑顔。

何やら筋トレ用の設備が整った部室と呼ばれる汗臭そうな部屋へ案内される。

『へへっ、僕この汗の臭いが結構好きなんだ。ちよっと変かな。』

『ちよっと』っていうのは個人差による認識の相違があるけど俺のものさしだと

それは『ちよつと変』じゃなくて『大変』だった。

その部室で繰り広げられる生活は正直たまったものじゃなかった。たまたま肩がぶつかっただけで

見つめあったりとか一緒に汗流したりとかシャワールームで何てなぜか恥ずかしがってたり

とかもう本当に世界が終わるなら今であってほしい。

そういえばずっと画面見て引いてたけど智風達は平気なのかな。もう気絶とかしちゃってるんだろつか。

そう思つて隣を見る。

智風は「おお・・・おおお」というように眼を見開き、すごぶる興味を持ったような眼で画面を見ている。何か順応しちゃってるんだけどこの子元に戻ってこれるのかな。

古門はというと、一家団欒で食事をしてるときにまたまた付いていたテレビからエロいシーンが

流れお茶の間にきまづい空気が流れたときの表情に似ている。あと俺のエロ本が見つかった時。

正直あれは両親に見つかったら切腹でもしようかとも思っていたけど見つけたのが

姉ちゃんだったもんだから切腹しようと思つた。

「空也ちゃんこういうの好きなんだ・・・。お、お姉ちゃんとし、して・・・みる？」

「何も言つな顔を赤くするな恥ずかしがってみたりするなもうやめてください何でも言つこと聞くから！」

「ああん空也ちゃんのケチー！じゃあお姉ちゃんと……楽しんでこいこい？」

とのことで姉と二人でカラオケ8時間は軽くトラウマだ。そして姉ちゃんの歌の八割がラブソングっていうホラーね。

すると画面に文字が並ぶ。

『先輩の家に行く／行かない』

というフラグ分岐点だった。ちなみに何回も言っけど先輩ってむっちりエロボディの女の先輩じゃなくてがっちりムチボディの男の先輩だから注意。

「うーんコレはどっちにした方が良いのかなあ。何か簡単に訪れても罨かもしれないしなあ」

と、御巫がうなる。さっきまではバシバシ自分で分岐決めてたのに今回は結構お悩みの様子だった。

確かに今までと違って『自宅訪問』ってのはこの分岐だけで結構ルートが変わってくる。

ちなみに俺は毎回『行く』迷わずに選択してるんだけど何でバッドエンドなんだろうね不思議。

だからここで迷うのは結構妥当だと思う。

「時雨ちゃんならどっち？」

と、徐々に世界観にはまりつつある危険少女に問いかける。

「ええっ家！？あの……そういうのはほら、順序ってものがあるなああると思うから……」

その、あの、えと、ここここは行かなくてもいいんじゃないかな。もっとう。

な、仲良くなつてから」

と、顔から湯気がでそうなくらいに真っ赤になった顔で答える。

あれなんだてつきり羞恥心を捨ててエデンへの扉を開いたと思ったのに意外と照れてるのかなこの子。

すると御巫女の顔がいやらしい笑いの表情になる。

「へえー、んじゃあ時雨ちゃんは相手の家に行く前にどついう順序を踏むの？」

「そりゃまあ、で、デートとか映画とかとりあえず二人の時間を作・
・・・・・・・・・・・

わあああああ！バカあ！何言わすのよう！」

「あはは時雨ちゃん可愛い」

と、何とあの智風がからかわれていた。仲いいなあとは思ってたけどなるほどこいつもいじられる時も

あるのか。そうかそうか。それじゃまあ俺も普段の仕返してことで

「はっはっはー！可愛いなあ時雨ちゃん！」

「！ー！」

「ぐああああ！ピースで目潰すな！的確すぎんだろ！」

「失せろ」

あれおかしいな何で今はこの子がいじられる空気じゃないのこのままじゃ俺の目を処置いじしらないと

失明の危機だよ？

「まったく可愛いつて言っただけで目潰すなつての、せつかく可愛いんだから大人しくてりゃいいのに」

しばしの沈黙。てつきり次は口でも裂かれるかとも覚悟してたのに何とノーアクション。

大人しくてりゃいいのにつて言っただけで素直に言うこと聞くやつじゃないのに、どうしたんだ？

そう思つて智風の顔を覗きこむ、もしかして具合でも悪いのか？まあ無理もないよな
結構インパクト強いゲームだもんな。

するとそこには智風の顔、というよりは真っ赤に熟れたトマトがあるといった方が表現的には正しいものがあつた。

「かかかかわかわ私がかわいかわかわあわわわわそんなうわああわああ」

「ん？」

何の呪文だ？ミステリーサークル開発のふつかつのじゅもん？

それとも新手の無視？いじめへのヘブンズゲート？

意味が分からんぞまったくこれっぽっちも。

不思議に思つて古門を見ると目をそらされた。あれ？もしかして俺嫌われてる？

「古式ちゃんはどうちが良いと思う？」

御巫は次に古門に問いかける。

古門はうーんと悩んだあと、透き通るように綺麗な声を薄くピンクに染まった唇から発した。

「もしこの先輩が超能力、いや、カルマを持つてる者だとしたら接触は危険。

ここはあえて断り、カルマに対抗できうる力を宙に捜し求めにいべき。」

「んん！なるほどね！」

「なるほどね！じゃねえ！今ので分かったの？」

御巫は素でキヨとした顔になって逆に問い返してくる。

「えっ？今ので分からなかったの？」

「えっ？今ので分かるもんなの？」

あれ？俺がおかしいの？それともこの子が間違ってるの？それとも世界が間違ってるの？

脅威の低スペックな俺の脳が悲鳴をあげる。ちょうど脳内の首相が辞任表明をしたところだ。

御巫は再び画面に向き直ると『行かない』を選択した。

『先輩・・・ゴメンなさい。その・・・、僕今日は予定があるんだ』
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『だからその・・・また今度お誘いください』

そうだ空也青年！男の家などいってもろくなことはないぞ！どうせエロ本の見せ合いで終わるんだ！

なら家で新たな映像をインターネットという波に乗って捜し求めたほうがいい！

『じゃあ僕はこれで・・・』

そういつてその場を離れようとするや突然画面が先輩の家が変わる。

『……せねえ……』

『えっ』

『行かせねえ！』

そういつて空也青年の腕がつかまれ、無理やり先輩の部屋まで連れてこられる。

そしてベッドに無理矢理押し倒す。

それは普通、奥手な女の子に我慢ならなくなつた彼氏がその気にさせようと無理矢理行う行為だった。

あつ、これこの前のビデオの内容だ。

とりあえずアダム同士でやっていいことじゃない！流石に急展開はまずい！

こういうときこそ冷静になるんだと、どこぞのセリフを思い出して冷静に考えてみる。

そう、それはまだゲームを始める前、たしか俺は大事なことを確認しようとして

そしてそこで落胆した。確認したのはゲームのパッケージ。

とてつもなく良くないことが書かれていた気がする。

そしてこのシーンにとっても関係の深いもの。

冷静になった俺の脳内は、新しく就任した首相が議員どもを黙らせて高らかにこう叫んだ。

『いいか！黙って良く聞けお前ら！コレは18禁のゲームだ！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9501s/>

死亡フラグぶれいかー

2011年10月8日11時10分発行